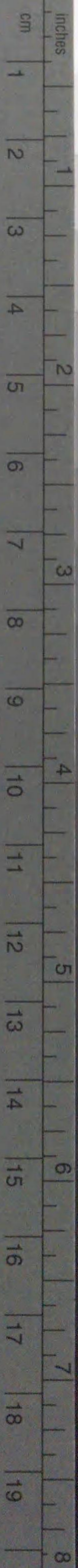


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

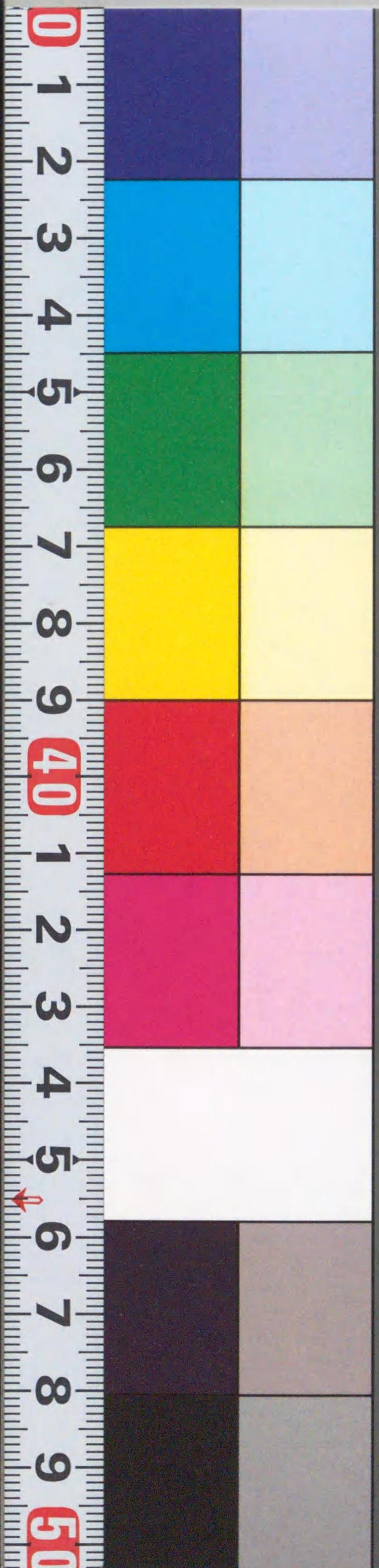
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

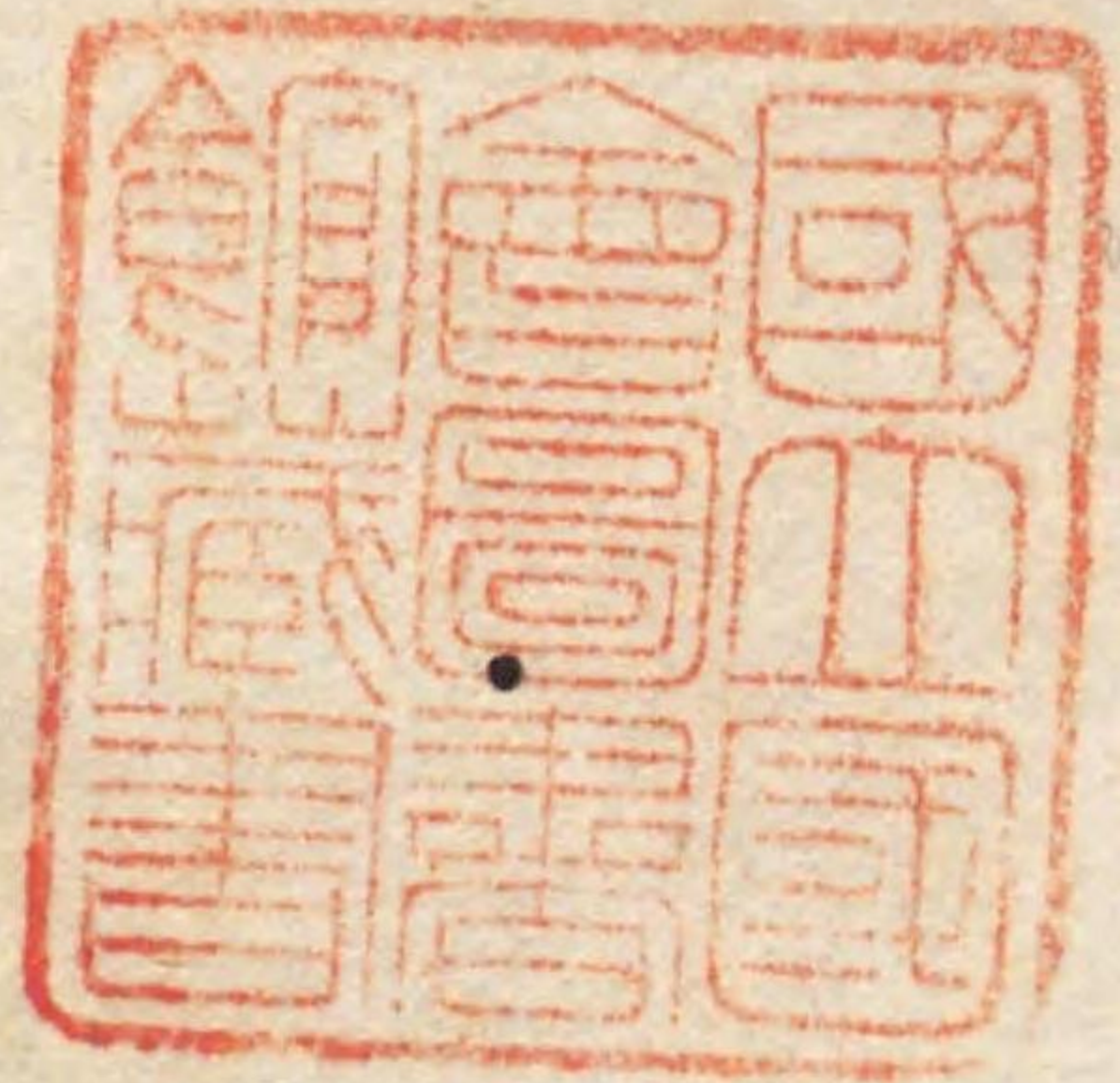
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



813.6
I 6199
NML

增補雅言集臨見 廿二

813.6
I619g
Nw



691338

増補雅言集覽卷之廿二

石川雅望集

中島廣足補

○太の部

たぐ ルタグ也 (中務集) 廿五、八の家より瀧流れたり「いかでかか過て行らん川波のさぎ

とまらるゝ宿の花より○契冲云おるよそかやうよかたる詞書のを屏風障子の繪

よあせてよめるかりいかでりのまぎて行らん馬をとめたる男の瀧といへる

かり川波のさぎとまらるゝとの馬の手綱をくりて止るをさぐといふ万葉九古今よ

もよめりそれを瀧よそへて道ゆく我さへかく宿の花の見過ぐたく馬の引とめら

るゝよと讀る也たぎとまらるゝいたぎとめらるゝをうつゝがへさるよもあるべ

一(古) 雑下 思ひさやひかのわかれにおとろへてあまのかささぎいさりせんとの

(方) 九ノ長哥 秋つねば萩咲匂ふ石瀨野に馬太伎由吉氏をちこち鳥ふとてゝ

(神代紀) 三十 即以千尋栲縄結爲百八十組(古事記) 十四 栲縄之千尋繩(方) 十六

「さねさぬきさかねばかがさいもが髪まの比とぬにさされつらん櫛ケツル(同)

七ノ八年兒の髪多久麻庭爾からひをる家よも見えぬ

〔たく〕 焚。香又薪イヘリ。(源) 山賤のいりよさけるをさくもことひまかんこふる里人(同) やとり木 九十五

(新後) 戀一 爲綱 「ほのかかる難波のあーびいかかれバたきをむるより身をまがせらん

〔補(後拾)〕 冬 相摸 「こやあまも初雪ふればそのまのまさのそとがまたきまさるらん

(玉) 雜三 後鳥羽院 「里人のいはりにたたる椎柴のふりふきく山おろしの風

〔たく〕 關。日タケテ。日夜四時。ハハノ部。歸コイフ。(新古) 秋上 家長 「秋の月一の宿かる影とて小篠が原

は露ふけよけり(堀後) 賀 「わが君のよそひとたたるうれさの大宮人の身よあま

るらん(夫) 四平 泰時 「春さけてきの川いろくながるめりよの、おくよ花やちるらん

(同) 九 俊成 「春も過つたぬれど氷室山冬を、さめておけるなりけそ(夫) 廿三御

右大 臣 「いせの海波よさける秋のよれ有明の月よ松風ぞふく(同) 九 忠 良卿 「まつ風の

夏さけくまよせさの梢よ秋やちかのうながま(同) 廿七千五百番 後鳥羽院宮内卿 「さしのぞ

る日り夕さけぬく朝あぎの雲をさそらよたづあそぶなり(新六) 一 信實 「今の春

の日かきやさけぬらんやよひの月のもとめかれども(古) 物 名 「さよふらてあかばさ

けゆくひさのたの月ふさかへせ秋の山風(補) 万代 雜二 後京極 「しるや君をいよと

くとしふりて我世の月も影とよけり(万代) (玉葉) 雜五 西園寺入道 前太政大臣 「中々よそひ

こはてぞいろまさる月と花とにそめし心(新古) 雜中 季能 「水の江の吉野の宮のかと

さびてよそひたけさる浦のまつあせ(拾玉) 一 「そよよれ松ふく風も神さびて夜

わさる月のりけさけにたり(拾員) 上 「あさかくちりぬく萩の下もさうつろふ

露も秋やさけぬる(山家) 上 「あまれもら月さとのぞる雲路をばわきても風のふれ

そらはかん

〔補(たく)〕 (万) 六ノ 廿三 「おほからばかもうもせむをのいあことふりさけ袖をさぬびたる

かも 此詞の例たし 振 痛

さぐる 田畔 (長能) 秋小鷹りりよまありあそきよある田のくろよそとあへトの

さなるをみて「やまかつの田くろよたてるそとあへしひとまぢえたるこちちけ

めや

〔たく) 貯。蓄(万) 十九 廿九 わたつこの神のこことのとくくは多久波比お死ていつ

くとふ玉よまさりておもへりあが子よあれど云々

たくはへ 体ノ語(源松風) 四 そのあたりのさくそへの事どもをあやふけし思ひて

畑コイフ(うつろ祭の使) 廿七 御心まそくたしか物つくさきさくそへ心よくありて

こともあき人あり(補) 同 七 廿四 たからをさくそへしことハ

とぐへの所よ出す

とぐち 田口(夫)十一「山かけのとぐちよこてるをまへへわきひとりのみ見るぞかあしき」長能

たぐり 嘔吐(神代紀)上ノフツカハナヤム悶熱懊惱因爲吐(古事記)上多具理

とぐぬの(夫)卅三「いかあればこひまむさるゝとく布のおどさゆみあるひとのおころぞ」仲正

とぐる(遊仙窟)三縁細葛(曾丹)三月「ミネのうちの引網のつなたぐれども長きハ

春のひと日かりけを(堀後)兼「うかひふねつなで下はと見えつるべいそぎてたぐ

るゝかそおをけり(夫)十一「ミそのふのませの秋そぎあゝとぐりとぐるよつけて

おそきゝとかな補(万)十一「ふりこほのかとみとのわか草をかみよとぐらん

妹をしぞおもふ たくお(保元)一「己をどの者をバ矢たくおよ(前太平)十矢とくおゝりといせんもを

こかま是雅言コハアラザルベシ飯ダクナ人ダクナナド云 たくおと拷繩(万)四十「長歌たくおそのおがきいのちを(中務)卅「とくおその夏の

日くらゝくるゝくてあどろく長きいのちあるらん(後撰)一「いせの海よとへても

あまるたくおその長さあゝろいこれぞまされる(夫)卅一「あまのをむ里よなはて

ふたく繩のおがきうらゝいぬふぞくるゝき(同)一五「たくおをそ千ひろの濱

のくりうへゝこれよあまの世をつくれらん(同)野宮左大臣「宮るせよ千尋たく

繩君がさめおが死契をむそびそめけん(同)同(新六)三家「海原や底のこゝろもあ

らるやとちひろたくおを打もへてせん(同)内大臣「あさゆふのあまのとくおを

いとまおみ此世をのりをくるゝとや思ふ(新千)戀三「いせのうとあまれとくおを

我がさにくゝちひかねづくる夜ももなゝ

とくらぶ(方丈記)我身一つよとりて昔と今ととくらぶるあり

とくむ 巧。タクミ体ノ 語ハ次ニ出 たくま白文十五愛才心儻(盛衰)卅四「くろくを夕の馬たかさ八寸ふとくまさき夫廿六「あら磯の岩もとめすり立波のたくまさきまでぬるゝ袖りか

とぐふ(兼盛)十「戀とのかよをかいせん岩波よとぐふみおこのきえぬさかりを

(貫之)十「此川よさらへておがはあとのその波の花よぞたぐふべらある(躬恒)廿

(古)春「とまるどいべき物からなくあしよさかかくもあるをおとよとぐふ心の

(同)(六帖)(菅万)上「花の香を風のよよりたぐへ交へてぞ鶯さをふするべよ

やる(日本紀)十一 つく弓よまり矢を多具倍(源 わかし)十四 一年へつるとまやもあれ
 てう泥波のりへる方にやみとさぐへま(忠見)九 「ぬさよりもかくくわれやと
 ぐいまいかみど茂うくるたらひありやと(敦忠)八 「我ひとつたぐふる風を八十島
 のまつのあらしあふぎくらべよ(貫之)七上 「千世までの雪りとそれバ松かせよ
 さぐひてたづの聲ぞきこめる(仁徳紀)十 瀾致チユク區茂能モノ多愚ダグ譬氏ヒテ序豫シヨ枳キ(万)四
 「人もおき國もあらぬかわきもことさづさひめきてたぐひてをらん(古)五
 年をへてえかへりまうでおざりけるを此國より又使まかりたりけるよさぐひて
 まうできさんとて出たりけるよ(源 夕かほ)九 けふりよさぐひてまひまわりなん
 といふ(枕)四 内の局はそどのいみとうをかくりこの小部あはさきバ云々 冬の雪
 あらきおどの風はたぐひて入たるもいとをか(源 藤はかま)五 おあがりも御供よ
 さふらふべくなん思給ふると聞え給へばたぐひ給せんもおととさきやうよや侍
 らん云々(貫之)八下 「岩の上よりちりもかけきとせとの羽は袖のみこそいたぐふべら
 かれ(補)(万)十二 梓弓末のしらねどうるさみ君よさぐひて山路こえ來ぬ(万代)
春下よと八 「おもひし花にさぐひて日をへし我からざらん人よをらるさ(同)一
人しらす 定 「つきかさをかやくもくるし白露のきゆるよたぐふ命ともあ(新拾)冬後徳大
頼 寺左大臣

「沢く人の袖さへぬれぬ木葉ちる音のさぐきにたぐふのみか(同)貫之 「山高と梢
 を分ておがれくる瀧はたぐへておつるもみぢを(万)十七 妹もわれもあゝろのおや
 トたぐへきといやあつかう(山家)下 「分てゆく山路のゆきふかくともとく立
 かへれ年よさぐへて(万)十五 云々 明くれの沖にあづさふかもはらもつまとさぐひ
 て(源 行幸)二十 ころくしうえらむせ給んたづねよさぐふべき人あんなき(新古)
秋下攝政 太政大臣 「たぐへくる松の嵐やさゆむらん尾上よかへるさをかかの聲(新續古)一
直明 王 「吹風のたよりありともめよとえぬ心のいろをいあさぐへん(續拾)忠信
 「さぐへてもしらトあふトの夕はふり猶さちのざる思ひありと(續後拾)慶門院
 條一 「わが思ひ空よたつ名のをしをばふトの烟よさぐへどよせ(拾玉)四 「秋の
 さら冬のあらしよたぐむせバ風も紅葉もかひかからま(同)五 「うつ人もさぐふ
 あらしもうとたよよきぬとの音をかれしものよて(新續古)別重如 「心をバ君よたぐ
 ふる旅おれバわれもとままるあちやひける(万代)雜二 後徳大 「今のたぐ月もあ
 がめトそれやらぬ心たぐはばくもりもぞせる(同)戀一 爲家 「いとようつあらいそを
 とたぐひとてくたくる玉のこれや何ある(源 行幸)二十年月のらうよかりのざるさぐ
 ひあれどあかたぐふべきもあしとあらバ(新拾)雜中 道命法師 「あづさゆと君よまとる

にさくそねばともたかれさるこゝちあそをれ

とくさ(古事記)上ノ天宇受賣命手次繫天香山之天之日影而爲鬘天之眞拆而手草結香山之小竹葉中世にいはいはぬ詞あり

たぐさのえた(堀太)(夫)十八「あらにぎてたぐさの枝とりかざさうたへあくるあまのいそりと

補とくさ 田草(万代)雜一「とくさひく岡のうら花ちるまで猶こゑのぶると、ぎはりあ

たくみ(雄略紀)廿大君一柯柁俱都柯倍麻都羅武騰わがいのちもながくもがといひ一柁俱瀾幡夜阿多羅陀俱瀾幡夜(枕)十五とくこの物くふあそあや一りき云々

(夫)卅(万)十一、「とくかにかくは物のおもとせひどくく人のうつ墨繩のたぐ一をぢよ(同)同信寶「うつりまささけさやくちよあふひつバ心ありけるかあどくとかな

(同)同「そまたくもひくやまさけのつあおよさあそあつされ山とよむらめ(同)同「まさけさるひものさくもやいでぬらん村雨やみぬ笠どりのやま(源)木

木の道のたくみの万の物を心よまのせてつくり出れも云々(散木)下卅三あそれむか一のあたくとをつかさどりも云々ノ頭ノ木工

たくとづかさ(源)桐つは)卅さとの殿のそりさくもとづかさ宣言下りてよかうあらしめつくらせ給ふ

さくみ(古)序文屋の康秀の詞のたくもよて(散木)中五つれなくのみ侍りける人「あはくれの物思ふ事をたくもよてとりかくむねをさる人ぞあき

さくもどりの巧鳥(散木)下ノ四「姫小松ねたくもどりの姿をバ立へたてけるさるのかそこの(續千)物名さくもどりの(和名)十八巧婦和名太久好割葦皮食中虫故亦名蘆虎

たぐひ(類)心ハカハラテド土佐若紫あけまきナ(榮)石蔭)廿一とまるたぐひのおそくして戀しあかと思へども(新後撰)秋上よみ「うくりけるどが身ひとつのあふぐきとたぐひありとや鹿もかくらん(源)未摘)廿あやわたあど老人共のきるべは物のさぐひ(土佐日記)下こゝやいづあどとひねれば土佐のとまりとぞいひける云昔

あそ一在所の名さぐひよああるあそれといひてよめる歌云々(源)若紫)七おあトさまよ物一給ふあるをたぐひよあさせ給へ(同)あけまき)四十わが心のやうよひがくしき心のたぐひや又世よあべあめる(同)がけるふ)七目のまへまなくあ

さらんかあささいみドくとよのつねよてたぐひある事あり(同)こてふ)廿世よ

さぐひあるまどき心ちなんぞ(同 是たる)廿夕よさぐひおそからぬことゞもの
 このとあつめ給へりけんか(千載)賀院「いくちよとかぎらざりけるくれ竹や君が
 よもひのたぐひあるらん(源 桐つは)廿世よさぐひか(見奉り給ひ(源 夕顔)七前
 裁のいろくゞとどれたるを過げてよやすらひ給へるさま々にさぐひか(蜻蛉日
 記)中ノ いくこゝちいとさびくもくるしうもいみどろ物をかう思ふ事さぐひ
 か(遊仙窟)四 人間少足(山家)上「さぐひかき花の姿をみかへ池のかゞとに
 うついでととる(蜻蛉日記)上三 あいかうと思ふまでいみどろかかしく心もとを
 御事にかくおもひおぼりたる人の袖をぬらさぬといふたぐひか(源 桐つは)二かた
 トれかき御心ぞへのさぐひかきとのみよてまどらひ給ふ(蜻蛉日記) 二、男君女君
 シ後女ノ むか(御覽せ)道と見給へつゝまかりいりりどさぐひかき思ひや
 文ノ詞 聞えさせし今いととくまかぬべしとかけて云々 九ぐひて 九ぐひ 所へ出ス
 り聞えさせし今いととくまかぬべしとかけて云々 九ぐひて 九ぐひ 所へ出ス
 さぐも(新古)冬、入道 關白 「ふる雪よたくものけふりりたえてさびくもあるか塩が
 まれうら(後拾)戀二 實方 「浦風よかびきけりを里のあまのたくものけふりこゝろよ
 こさ(新續古)戀一 左大臣 「かびのせのいりよせんとかまのあまのたくものけふり
 思ひたつらん(千載)夏 俊成 「さまたれはたくものけふり打りめりしぞれまさる

そまのうら人(新千)戀一入道前 太政大臣 「あまたたくものけふりの烟さつそらもかくしから
 き身のおもひか(同)戀二 爲氏 「あまのたくものけふりかびくともことうら風をい
 かゞたのまん(新勅)雜二 西行 「わかうらのし木りさぬる契をばりけるなくものあ
 とよてととる(續拾)戀一 路右大臣 路右大臣 「たられとたくものけふり下はのむせおおも
 ひのせめてうき身

さくせん 託宣(拾遺)カガ 住吉の云々あるひとのいそく住吉明神のさくせんとぞ
 (後拾)雜六 長安四年 云々 いつきみづから託宣して祭主輔親をめて云々(榮 晚待
 星)十 其比いせのたくせんをといひて云々

たやま 令絶 別ニ(千載)序 かつの道をさやさむらんがため云々
 ナリ 出ス
 さやま(續紀)廿五 多夜須久(万)廿一 ことよいへき耳またやま(續紀)廿四
 ナリ 容易 多夜須久(万)廿一 ことよいへき耳またやま(續紀)廿四
 多夜須久行 無止 所念坐而(白文)六ノ 易爲興所牽(詞花)雜 互につゝ心事ある男のた
 やまくあそとらとければ(古)序 今此事をいふよつかさくらるたかき人をばた
 やま死やうかれればいれそ。契云憚りて評判セヌハシカルベキ也

とま 玉(万)手よまける玉、手よまく玉、浦にのへり玉、玉ゆゑあき人、涙の玉、夜
 光る玉、手よもつ玉、波の玉、以(夫木)(神代紀)上ノ 瓊玉(古事記)上ノ やさかのまが

六)五 卅一 「いよゝへのさづけゝ玉のわさつみの志はひゝちあゝろかりけを(夫) 卅四 釋教、法 性寺入道 「浪間より一の玉をさゝたせのいりて五障の雲はさまゝ。龍女の佛

は玉を奉りたる法華經の故事也 補(兼盛集)駿河はふゝといふ所の池はのいりゝ かるたまかんわくといふそれゝぞんとの祭けける日よきてうたのそる 「つかふべ きりせゝをとらん淺間あるとたらゝ河の底よこく玉

たま 魂靈(源桐つは) 七 「さづねゆくまがろゝもがあつてよてもたまれありかをそ こととるべく(古) 哀、よみひ 「聲とどよさかぞわかるゝ玉よりもあき床はねん君ぞ のかゝき(玉葉) 卅二 忠岑 「わがたまを君が心よいれかへておもふとなよもいと せてゝが(源かしの木) 七 夕よあくぐるゝたまやゆきよよふらんをせいとゞゝれ

あゝちよもとどるれば(いせ物) 百十 「思ひあまをいよゝたまのあるからんよふ りくみえはさまむすびせよ(源あふひ) 卅 「あきわびをらにとどるゝわがさまを むせびとゞめよおたがひのつま 補(大和物) 百四十 「かたとのみ水の下よてあひみ れどたまなきりらひかひなかりけを

補玉いづるゝま(うつろ吹上) 卅五 上冊 たまつゝまよいり給ひて云々 「年をへてなみの

よるてふ玉のをよぬきとゞめをむ玉いづるゝま 「おせつかか立よるかこのかりり せば玉いづるゝまといりてをらまゝ 「玉いづるゝまよゝあらばわさつみの浪さち よせよとる人あるとき

補さまゝ (詞花) 秋 顯季 「あまれ河たまさゝいそぎわたさかんあさせたどるも夜の ふけゆくよ(新葉) 秋上、冷泉入 道前右大臣 「くれゆけばあふ瀬はわさせあまのかさゝづかけぐ さのつゆのさまはゝ(夫) 卅 卅 法性寺入 道太政大臣 「このへにたゝめるたまのみさゝよりあゝ ふくつきのねりのぞるかあ

たまさゝき 地膚(万) 十六 「玉掃りりて鎌まろむるの木とあつめがもとゝか死そか んため(同) 十八 五 「初春のまつねのふの玉を、死手よとるからにゆらぐ玉のを (堀太) 子日 仲實朝臣 「玉を、死春は初子よたどりもて玉の緒をぐさかゆべらあり 補 (夫) 同 久安百首子日 「あたらゝき春の初子に成よとりゝづのまろやに玉を、死と る(同) 正治二年百 首俊成卿 「玉を、さまつねの松よとりをへて君をぞいとふゝづのこやま

で(玉葉) 賀=出 (千五百番) 季能 「たまさゝきこきもちとせのためゝとて初子のまつよひ きそふるりか(正喜) 二年毎日一首の中 爲 家 「初子とてとるてふはふのさまさゝき千 年とまつの手よまかせつゝ、

東大寺寶物圖中所載

玉簪



廣足云此玉ハ紅白青也

長二尺許把圍四寸許
紫革包之金線繫珠以
纏之簪鬢飾珠皆紺色

萬葉集卷第廿云天平寶字二年春正月三日召侍從豎子王臣等令侍於內裏之東屋垣下即賜玉簪肆宴于時內相藤原朝臣奉勅宣諸王卿等隨堪任意作歌并賦詩仍應詔旨各陳心緒始春乃波都彌乃家布能多麻婆波伎手爾等流可良爾由良久多麻能乎右一首右中辨大伴宿禰家持作

辛鋤



長四尺五寸許白粉塗抹
用赭色繪行雲似木理

鐵鑊金嵌

鋤柄銘字墨書

東大寺子日獻

子日辛鋤
天平寶字二年正月

玉簪 俗稱チンド草亦コウヤ等或云茶セン柴野生宿根高二三尺靡狀長キハ四尺ニ及ヘリ八九月小白花開ク一萼十二花其狀白朮花ニ似テ小様ナルモノ也

萬葉集卷十六長忌寸意吉麻呂詠物歌ノ中ニ玉掃苜來鎌麻呂室乃樹與棗本可吉將掃爲トアル此草ナルヘシ卷廿ニ天平寶字二年正月三日召侍從豎子王臣等令侍於內裏之東屋垣下即賜玉簪肆宴中應詔旨各陳心緒始春乃波都彌乃家布能多麻婆波伎手爾等流可良爾由良久多麻能乎右一首右中辨大伴宿禰家持作トアル此時ノ御簪今尙東大寺ニ有テ其杙ハ即此チンド草也堀河百首題子日仲實玉簪春の初子ヲ手折もち玉の緒長く榮ゆべらかりトアルハ手ヲ取からよノ孫枝ナレモ草ノマ、ニテ振マハレシハ妙手也○チンドノ名ハ紀人ノ説ニ若山ニテハチンド簪ト呼ヒ又コウヤ簪ノ名モアリテ高野ニモ熊野ニモ山中スベテ多シト云リ土佐人ノ話ニ本國ニテハ垣籬ニ用フ樵夫ノ市ニ鬻クモノ垣チンド姫チンドト呼テ長短剛柔ノ少異アリト云リ京ノ上賀茂ニチンド祭ト云フアリ賀茂注進雜記ニ燃燈祭正月日本社權祝并各祝布衣參向獻小松燃燈草等ト見ユ同攝社澤田稱宜山本經紹縣主ノ牒ニ當日とあれ野ヨ行テ燃燈草小松を引テ本宮より末社まで供ふる也此草の和名を玉簪と申傳へたりトアリ中古チンド草ヲ音使メチンド草モ云シカラ燃燈ノ字ヲモ借り用ツランヲ後人文字ヲ主トメ年東ノ如ク清ミ唱テ古名ヲ暗マシ此草ヲ燭火ニ用ル古儀アリナド嘘説ヲサヘ造出テ燃燈ノ字義ヲ強ルニ至レハ漢字ノ毒ニ醉ルモノナリ綺語抄中卷

器物部正月初子の日のひそくさばるるニ燃燈といふ物をいふかり燃燈を箒よいて當豈の蠶室を掃く也トアル本文脱誤多クテ解アヘヌ所ヲ今ハ切畧メ引リ次ニ或人のあそと擧タル二件ノ一ハ初子の日の松をいふトアルヲ袖中抄ニ引出テさむが松といのおやえむト破レリ又一ハめど、こそいへ佛の御名よこそ燃燈とい申セトアリ著ノ訛稱トセシハ或人ノ粗按ナレド燃燈ノ字ヲ借り用シテ七八百年既ニ斯ノ如キヲバ知ルニ足レリ綺語抄ノ作者ハ八雲御抄ニ仲實ト記タマヘリ然ラハ彼ノ手折もちモチンド草ナルコ必セリ肝要抄ニ松の異名也ト注シタルハ手近キ袖中抄ヲダニ伺ヒアヘヌ妄説ナリケリ



新莖一葉五生



老莖三四葉簇出無花

東大寺ノ寶藏ナル玉箒ハ長二尺許箒鬚ノ抄毎ニ紺色ノ細珠ヲ帽ラシメ把ハ紫革ニテ包タル上ヲ金ノ系ガ子ニ五色ノ細珠ヲ貫タルモテマキシシタルガ年ヲヘテ系ガ子ノ絶レ相子タリト見ユルモノ二柄アリ紺珠搖々トメ塵ヲ驅ルノ具ニ非ス一時ノ儀箒ノミ彼ノ萬葉集ナル天平寶字二年正月三日ノ初子の玉箒即是ナルベキコトハ同

寶藏ニ鐵鏡金嵌ノ儀鋤アリテ其柄ニ子日辛鋤天平寶字二年正月ト銘セル同時ノ用相證スベキ也但二柄ハ帝ト光明皇后トノ御ナラン歟諸王卿ニ賜シハ其製ノ精麗今知ベカラス○袖中抄ニは絲の髓腦ヨハ玉箒とい著ト云草也正月初子の日蠶飼をる屋を掃けいほめて玉をいさとい云也ト見エタルハ古傳説ニヤ注ハ一本ニハトテ注シ又無名抄云ト引テ蠶飼ふ屋を掃をめさせて祝ことさにいふ歌ありとぞ云傳へるト見エタルハ家持卿ノ歌出テ後ノ云傳ナルコ論ヲマダズ抄中引用ノ諸説ノ源ハ家持卿ノ一首ニ起リ天下玉箒ノ名ヲ傳ルモ亦此一首ニ依ラザルハナシ○養蠶ノコト神代ニ大宜都比女命ノ御頭ニ蠶生レルヨリ雄略天皇紀六年三月丁亥天皇欲使后妃親桑以勸蠶事ト云コトナドモ見エタレド正月子日ノ式ハ聞エズオボツカナキコトナレモ髓腦ノ説ニ從シノ他ナシ又西土ノ后妃親蠶ノ例ヲ按ルニ周禮ニハ仲春ト云ヒ禮記ニハ季春ト云フ晋書ノ禮志ニ漢儀皇后親桑祭蠶神トアルハ二月三月也又同志ニ魏文帝黃初七年正月命中宮蠶於北郊ト云ル正月ハ時候叶ハズ此ハ蠶神ヲ祭ルノミナルベシ但正ハ三ノ誤字歟魏志ニ此事見エズ晋書一度宋書一度各三月ナリ中絶シテ唐書太宗紀一度高宗紀四度各三月巳ノ日ナルヲ玄宗紀開元元年ハ正月辛巳ヲ用フ天平寶字二年正月三日ハ巳ノ日ニハ非レモ正月ヲ用ラレシハ四十五年前ノ

開元元年ニ倣タマヘルニヤ唐ニテモ肅宗紀ニ乾元二年三月己巳此事アルハ昨年正月日本國ニテ天子耕織ノ禮儀行レシ由ヲ傳聞テ俄ニ思立シニモアラシ歟又按ルニ孝謙天皇ハ女主ニテ御坐セハ此時禮記ノ月令ナル孟春之月天子親載耒耜躬耕帝籍ノ式ヲ行セラル、一緒ニ后妃祭蠶神ノ儀ヲモ並べ行レシ歟正月三日丙子ハ家持卿直ニ初子ト詠タマヒ當日御物ノ耒耜ノ柄ニ子日辛鋤ト銘セルナドヲ思ヘバ正月初子日ヲ尙フ、此時始ルニモ非ズ古クモ行レシコアル歟小松ノ根ヲ子日ノ名ニ引合スルナドハ寛平延喜ノ比ヨリヤ始リケン○彼ノ上賀茂ノ野山ナルチンド草ハ子ノビ草ノ訛ニハ非ル歟本草家ニモ高野箒ト呼ナレタルマ、ニテ漢名バ未詳ト云リ爾雅釋草ニ菴ハ馬帚トアル所ノ郭璞カ注ニ似菴可以爲掃帚ト云ル此モノナラン歟又菴ハ王藝トアルヲ郭注ニ王帚也似藜其樹可以爲掃帚江東呼之曰落帚ト云ルヲ本草綱目ノ地膚ノ釋名ニ載タル宜シチンド草ト混一スベキニ非ス然チ谷川士清ノ和訓栞ニ本艸ヨモ玉簪玉帚の名ありト云ルハ王ヲ玉ニ牽附シ也成形圖說モ此谷川ノ流ヲ汲レシハ遺憾ト云ベシ右穂井田忠友ガ觀古雜帖ニ出ストコロノ圖說ナリ

たまさを賜ハル。物モロフタル人ノ(いせ物)忘草を忍草とやいふとて出させ給へりければたまさりて(源 桐つや)廿藏人所の鷹を忍て給たり給ふ(同 夕顔)四局を

とちかく給りてさふらひせたまふ(枕)それ給ひりて(同)廿一其きぬひとつとらせととくやりてよと仰てとあれバをき給さらるぞ(万)廿四「いにしへの人のをさせるきびの酒やめばをべあしぬきさをさらん(同)八ノ「玉よぬきけたる賜良牟秋たまのうれわいらをよおける白露

たまさを賜フチイユノ。ツケテイフ詞也。(源きりつや)五うへつほねまたまの(後拾)別 三月をりり筑後守藤原爲正國よ下り侍りける扇給ひはとて(源 繪合)廿ろくともの中宮の御方より給それとあひ御を又かさねて給り給ふ(同)廿うへ人の中よをぐれたるを召てもうし給それ(落くる)一さるべきやとべる給とせてんや(同)同たれ物ハ此御もきに給いせりしを夢をかりつゝとてお死て侍りていとろうをうたれ句を(同)同とりぐればきくど物かと侍りぬべくいをこしたまのせよ

たまよきさ 玉ニ瑕。玉ノキスノ所ニ附ス

たまへ(源 手習)七りのことまごさかんと聞つけ給へらバコレハタバアガマイフ常玉へハ玉へナドハタマフノ所へ出セドオノレガ上

たまへ(源 貴人ニ向ヒテハオノガレハ上ニツケテイフ詞也)眞淵云出雲國造神賀ニモ恐美恐美申賜久云々

大祓詞ニ祓給清給是ハ給ふるトモ動カシ云リ人ノ上ヲ敬メ云給ふハ給へり給ふ給
のんと動カセドミヅカラノ上ニハ給ふる給へりナド動キテ給へり給ふトイハズト
イヘド(源 東や)七 ざる便りあり給へりとり申也○是ハ心得ズモシウツシ誤リカ
給へノ詞知リトイフヨリウケタル例ナシ○見聞思ノ下ニソヘテイヘリ見給へ(源
花の宴)十 後代の例ともありぬべく見給へり(同 夕かや)三 昔見給へり女房の尼
にて侍る(同 若紫)十 尋聞えまほしき夢を見給へり(同 夕かや)四 物思ひよやまひつく
物と目ぢのく見給へり(同 夕かや)六 谷よもおち入ぬべくかん見給へつ
る(うつや 俊蔭)下五 まことそらごと見給へんとてまうできつる(源 すま)九
死たあき人の見給へんにつれても中くうき世のがれかたう思ひ給へられぬべけ
れば(同 わか紫)五 ありさま見給へりよりて侍り(同 浮ふね)八 人のいかでか
見ざりつるぞか忍びての給ふ見給へり(同 夕かや)六 いかでかの参らせまゝをべて此子
の心ちあうさゝをくして侍り(同 若むらさき)七 かの御をおちがきをかん猶見給へ
まゝ(同 夕かや)七 甘さゝも見給へり(同 わかし)四 甘あかひ
て侍る袂よつゝとあまりぬるよ更に見給へぬも及び侍らぬか(同 夕かや)一 ことさよかん(同
をとめ)廿 三 づから(同 わか紫)五 づつひよ

むさゝく見給へり(空穂 吹上)下ノ 四 あや(同 夕かや)一 見たまへつれてえまう
のぞりおざりつるを(同 夕顔)九 も見給へるおともや侍るとそかあきついでつ
くりいで(同 夕顔)十 案内のある所をく見給へおれながら(同 夕紫)廿 心を
そよ見給へおくなん(同 夕かや)八 とかく見給へあつかひておんなど聞えて(同
と、さ、)四 女のおれ(同 夕かや)一 もとあんとくまどき(同 夕紫)三 かの御女物
ん見給へり(同 夕紫)三 かの御女物
給ふとき、給へり(同 夕紫)九 只此おまの頃をひ申と聞給へり(同 夕紫)
、さ、)廿 主の娘共多かりと聞給へり

思ひ給へ(思ヒテ思ウト音便)同 廿 さりとめえ思ひとあれたと思給へり(同 夕紫)廿
恨のどけあんとおもう給へり(同 紅葉賀)七 花よさかあんと思ひ給へり(同 夕紫)廿
き世よとべりけき(同 夕紫)六 御琴のひびきから(同 夕紫)七 思ひ給へり(同 夕紫)廿
同 夕かや)四 捨がとく思給へつる事(同 夕紫)四 忘れぬよをがと思給へん
にの頼も(同 夕紫)三 何かあさく思給へん事ゆゑかうを死(同 夕紫)七 思ひ給へり(同 夕紫)廿
見給へ奉らん(同 夕紫)廿 かく世ををさるべき身と思給へらま(同 夕紫)七 思ひ給へり(同 夕紫)廿
ひ聞えま(同 夕紫)七 思ひ給へり(同 夕紫)七 思ひ給へり(同 夕紫)七 思ひ給へり(同 夕紫)七

も思給へむかから(同 わかし)廿更よくる(同 と)思給へむ(同 と、さ、)十所せう思
 ひ給へぬたに(同 わか紫)廿今の此世の事を思ひ給へね(同 と、さ、)廿あがらふ
 べき物とも思ひ給へざり(同)四十一かあさく(同)思給へざらん(同 末摘)
 卅いかでかいかさそらいたく思給へざらん(同 と、さ、)八思ひこりなんと思給へ
 て(同)同かこくをへたつるかかと思給へて(同 夕かほ)卅つらとや思ひんと
 思給へてまかり(朝野群載)三哥合 太神宮乃厚御願廣御助可有之念給 倍天 奈牟
 若紫一十うれい(同)思給へてかん(同)八うれ(同)思給へぬべき御事を(同)
 帯木四廿今より後のましてさのまかん思給へらるべき(同 末つむ)五御琴のねい
 り増り侍らんと思給へらる、夜のねまひよさをいれ侍りてかん(同)七せりう
 思給へらる、折く侍れ(同 繪合)廿心よりのことゆかぞかん思うたまへり(同)
(同 と、さ、)廿をむろさむくやと思給へられ(同 末つむ)九故あらんか(同)
 こを思ひ給へらるれといへ(同 わか紫)卅願ひ侍る道のぞ(同)思ひ給へられぬ
 べきかどさあえ給へり(同)卅うれ(同)思給へられぬべき折ふ(同)侍りあがら(同)
 橋ひ卅六おち物とも思給へられざりけり(同 夕顔)卅實とも思給へられね(同)
 桐つ卅十中々あるべし事と思給へあがら(同 わか紫)四十かいおにいとせち(同)

見るべきおとの侍ると思給へてかん(同 と、さ、)廿さをかりよて有ぬべくかん思
 給へ出らる(同 すま)十今いと世を思給へ侍るほどのうさもつらさ(同 末摘)
 九聞えさせざらんもひぐ(同)思たまへわづらひて(同 すま)六過侍り(同)人
 を世よおもう給へとる、よおくのみ(同 と、さ、)卅殿上をとも思給へかれあ
 がら(同 夕かほ)卅いとふびんあること、おもひ給へり(同)こまりてえまるらぬあり
(同 わり紫)七夕に思給へよりがたきついで(同)八所せうおせ(同)からで思給
 へよるさまことある心のぞを御覽せよ(同 桐つは)十えかん思たまへ(同)つまどき
(同 わか紫)卅常よ思給へちあがら(同)十取惜る思給へつ(同)とてかんいさうあ
 び侍りつる(同 夕かほ)四口惜う思給へたぬたひ(同 帯木)四十のちせもやと
 も思給へなくさめま(同 里か紫)廿行ての御詞の等閑(同)思給へあされ(同)
(同)十齡の末よ思給へあさき侍るめると聞え給へ(同 と、さ、)四十さぐひあく
 思給へまど(同)廿此二つの事を思給へ合(同 わか紫)上八思
 給へありゆけ(同 也ふか)六病者のことを思給へあつかひ侍る(同 葵)
 九只いまの空よ思たまへあまりてかん(同 野見)六此あそん侍へ(同)思給へゆ
 づりてかど御せうを聞え給へ(同 桐つは)十命あがさのいとつらう思給へ(同)

る、(同) 十物思給へ知ぬ心ちよもけにこそいと志のびがたう侍りけれ(同 帚木)
六 えたのむまどくおもう給へ侍る (同 桐つゆ) 十松のおもそんおとたまそづか
う思給へせれば(同) 十つらくかんかこき御あゝろさうを思う給へられせべる
思ひ給へは(源 かけろふ) 十やんごとなく物くくき筋に思給へばおそあらめ○此
給へバイカ、モシハ誤字ナランカ給へヨリスグニそへウケタル例未考

補 さまへ 転しいふ也 (元輔)云々 内へまゐるといひ侍りよのさまへ(同)人々
のぞこまうはとき、さまへて

さまぞ(万) 廿九 玉銚の道行くら(古) 戀四よる かの朝臣 「玉ぞおのちちつねよもまど
のかん人をとふとも我かと思へん○契云玉銚ハ道ノ枕詞也是二三ノ義アリ玉ハ物
ヲホムル詞也神代紀下大穴持命廣矛をつきてくよめぐりてとさめ給へるよあ
ればそれよよつてつゞくるか又武士の劔をつきて行ことあり准ふるよ矛をもつく
べければいふか又万 三銚榎之木とよめるの榎の直さが銚を立さるよ似たればいふ
う道をバ毛詩にも周道如砥其直如矢といひ文選鮑明遠が詩よの馳道直如髪とも作
りたれば銚を直き物よして道の直れよ諭へていふの
たまとこ 玉床 (万) 四十 「家よきて此屋をまれば玉床の外にむきなりいもがこまく

ら(同) 廿九 「あはよりの我玉床を打たらひ君といねせでひとりかもねん

さまどの 靈殿(源 夢のうきとし) 六むり物語よさまどのよ置さりけん人のさどひ

を思ひ出て(榮) 靈屋 別に 出す

補 たまちる 玉散 (新古) 戀二攝政 太政大臣 「いく夜我をよよせれて貴船川袖よたまちる物

思ふらん(後拾) 神祇 貴布禰明神 「おく山よとぎりておつる瀧つ瀬のたまちるさかり物

かおもひを 四ノ句ある類 句にいと多し

たまぬく(金葉) 戀上 左大臣 「見せをや君忍びねの草まくらたまぬきかくる旅のけい

きを(山家) 上 「東やのぞかやが軒のいと水にたまぬきりくるさまたれの頃(いせ

物) 百五 段 「白露のけをされかゝん消せとて玉よぬくべき人もあらトを(後撰) 秋中

人し 「秋の野におくおら露のさえさらば玉よぬれてもかけて見まほし

さまる さまりまづ さまらむ 共に 前 附 所

補 さまる (貫之) 「あさかきけづればたまる 拾遺 わがよかみのおもひみど

れてもてぬべらかり(著聞) 十四 雪のいくらそよまりたるぞ云吹さめたる所の一

尺よあまり候(後拾) 春上 嘉言 「梅が香をよそのあらいの吹さめてまれの板戸のあくる

まちけり(新古) 秋上 攝政 太政大臣 「くれかゝるむあしきそらの秋をみておやえだたまるを

そのつゆあか

補 たまる (著聞) 廿八、大殿がき、とがめてやどまれ平六此犬の予えやうの聞とがめぬり

たまをく (後撰) 秋中 忠岑 「秋の野はおく白露をけさみれば玉やいなるとおどろかれ

つゝ(万) 卅四 「あらりトめ君さまさんとあらませばかどよやどよも玉いかまよ

(源 初音) 二玉とけけるおまへのよよよりとめ見所おほくまがさま給へる (壬

二) 中 「またやとん又やとざらんあら露のさまおれける秋萩の花

たまりづら 玉盤。今のカモ (万) 卅三 「人のよし思ひやむと玉りづら影見えつ

つとせられぬかも (後撰) 戀四 「日とへてもかけ見ゆるの玉かづらつら死かがら

もさえぬかりけぞ (いせ物) 卅一 「人のいざ思ひやをらん玉かづらおもりたよのこ

いと見えつ (新拾) 戀五 爲家 「さまかづらいかよね一夜のたまくらよつら死契をの

りけそをきねん (伊勢) 廿六 物へゆく人に玉 「はづりこし心もするく玉りづらさむけ

の神よなるぞうれしき (源 蓬生) 十五、わが御ぐしのおちたりけるを集めてか 「たゆま

トき筋とこのみ玉かづらおもひの外よりけそをきぬる (同) 十六 「玉かづらさえ

てもやまトゆくとちのさむけの神もあけてちかせん (齋宮女御) 「りさもかく成よ

君が玉りづらかきもやをるとおきつゝを見む

たまかづら 玉葛 (後撰) 戀六 「くること日常からせとも玉かづらたのまいたえトとお

もゆるるかか (同) 同 「玉かづらさのめくる日のかせのあれどたえトはてりひ

あかりなり (伊勢物) 卅六 「谷せばと峯までとへる玉りづらたえんと人に我おもひ

かくに 葛也

たまがき 玉垣 (好忠) 十月 「三むろ山木の葉ちりよ朝よりあらににさゆるよもの

さまがき (夫) 七、經乘 法師 「卯花や玉がきしらく咲ぬらんさるかまかくる加茂の川をさ

さまがき (玉柏) (催馬樂) 「そのやまよとんトよおひたるさまがきのよのあかり

にあふがさのささやあふがたのささや (堀太) (千載) 冬 國信 「深山べのさぐれてわさ

るかせとよりとがましき玉柏のを (夫) 廿九家 集俊頼 「玉柏をさす風よさかられて

またきよ鹿やあまたてつらん

たまがき (是ハ石) (堀太) 戀一 後頼 「難波江のもよ埋るゝ玉がきのあらひきて

たよ人を戀せや (夫) 廿二石部 家長朝臣 「あらせせや思ひ入江の玉がきの舟さは掉の下よこ

たへて (同) 同 「かりそめのまゝの入江の玉がきのことをかりのゆくへたよな

(同) 廿九 「よーさらばさえかばさえねたまがきささけがまかけてとふもうるさ

〔新續古〕

戀四 親雅

「今ぞを不まさる涙のさまがいの藻にうづもれて何を夕きけん

たま〜

(うつは 俊蔭) 下四

さま〜

聞つくるけた物只此あたりは集りてあそれみ

の心をあして

(同 初秋) 下七

さま〜 参らせ給へと物せいかと聞いきられをかりに

き(同 樓の上)

下四

たま〜 對面のありがたくて侍り〜

さまたれ

(万) 七

「玉ざれの小簾のまと布し獨りて見るる〜かまゆふ月夜かも

(古)

雜上 敏行

「玉ざれのせかめやいづらこよろぎの磯の浪をけ沖に出にけり(拾)

不

「玉ざれのをける心とて〜よりつら〜てふことかけぬ日〜(同)

「玉をたれいとの大えまよ人をとてをける心の思ひかけてき(西京雜記)昭陽殿織

珠爲簾風至則鳴(夫)

卅二 簾讀 八しらす

「そきたりとめるされせとも玉ざれのひとまよか

てくるよ〜もが(同)

(万) 十一

「玉ざれのこれのをたれせゆきがてよいねら

をねせ君のかよせ

(後撰) 一

「君よよりわが身ぞつらきたまごきのをせいのこひ

〜とおもそま〜や(和泉續)

はふ雨のふるよ簾の玉のやうより〜るをあそれる

よも「玉たれのををからかくよわが袖のいと〜くのみぬをまさるの(曾丹) 順

「吹風のたよりよとそん玉ざれのをはもうこかば我と〜らめや(壬二) 中

「閨のうへの板間やある、玉たれの内よりいづる秋のよれ月(後)

二「玉たれおとめのま

よりふく風のさむくのをへていれむおもひを(拾玉) 二「軒ちかくまがふふたるの

をたのたよよ玉ざれのををかたてけり

たまごき

枕詞 又たいたす

(万) 十六

玉手次畝火之山のり〜そらのひとりの御代も

(古) 誹諧よみ

八しらす

「ことからば思をせとやいひひせてぬをぞ世の中れたまたはきなる

(源末摘)

七

玉たをきくる〜との給ふ(夫)

春一 信實

「袖ぬらけ澤べのこりあさりとてい

玉ざはきよやいれてつま〜(同)

卅五 爲家

(新六) 五「賤の女があさてははての玉を

死思ひかくればちがふよもう〜(夫)

四 知家

「さづねきて今ぞおめゆふ玉たをき雲る

る山の初さくら花〇契云万七玉を雲飛山とゐるをばうねびの山とよむある

を六帖にあやまりてその哥を雲る山と訓〜より後よ其あやまりを傳〜也(著

聞) 八ノ衣よさまごはきして魚をうかむひ

たまづき

玉章

(日本紀竟宴歌) 明

「からはをよをよもよこるぬ玉づさの君がみよよ

ぞ奉りける(古)

秋上 友則

「秋かせよ初かりがねを聞ゆあるさ玉章をかたてきつらん

(拾)

長哥よを 八しらす

我の心をさ玉づさかくてもたぬくむをびおきて云々(万) 二ノ玉

梓の使のいへば梓弓おとよ聞つゝ

〔たまをきの里〕

(後拾) 哀傷和 泉式部

「か死人のくるよときけよ君もあ〜わがをむ宿やと

まをれの里

補 九まらぬ (新後)

秋下九條
左大臣女

「荒れて、風もまらぬ故郷の夜さむのねやまころ

も打ちり (玉葉)

冬
實超

「風をらふみぎをれあいのせれかへりかびく末葉の雪もたま

らぬ (續千)

夏
爲道

「夕ぐれの本比下風に雨をきてつゆもたまらぬ蟬のまころも (宇

治拾)

九

をどこあせせけれと男もまらざりたまばこれやくと四五人までいあ

せせけれともあやたまらざりたまば (續千)

秋上
花山院

「萩の葉はおけるいらつゆ玉の

とて袖あつめどまらざりたまば (玉葉)

冬
清輔

「山がつのよもぎがのきも霜がれて

風もたまらぬ冬はきよなり (万代) (續拾)

冬
順徳院

「山風に時雨やとほくかりぬらん

雲もたまらぬ有明の月 (拾)

秋
能宣

「秋ぎりのまねも尾もまつ山もみぢれま

きたまらざりたま

たまむまび (源

あふひ
廿

「かたきまびをらまごるゝとがたまむまびとゞめよ

まごがひのつま (いせ物)

百十段
それが許よりこよひ夢よあ

「思ひあまりいでまご

まのあるからん夜ふかくまえ玉むまびせよ (袋草子)

四

「玉のつぬまのこれと

もあらねどもむまびとゞめよ下がへのつま (狭)

三ノ
廿三

「たまひのかよふあとり

あらねどもむまびやせまゝまごがへのつま (同)

三ノ
下

「あくがるゝとがたまひ

もかへりかんおもふあたりまむまびとゞめ

補 まるる (千載)

夏
道經

「ゆふされば玉あるかむもまえねども關の小川の音を

せいき (抄) 云先ひるまゝ關の小川の玉ある數涼りのりーが夕見えねどもかぐる

廣足
水玉あるべし

るおとのまゝいきとかり (新古)

を下葉の霜とむまぶ冬かな (月清)

冬
好忠

「草の上まこゝら玉るー白露

秋をまつらん (金葉)

秋
經信

「てる月のいはまの水よやさらむ玉あるのむをいかで

あらまゝ (後拾)

冬
好忠

「いとまよ氷のくさび打てけり玉るー水もいまのりこせ

(源わかあ)

下

「ちざりおんこの世からでももちにさをたまる露のこゝろへた

つな (新拾)

秋上
土御門院

「大井川ものかつらの月影まみがれておつるせまのいら玉

(新續古)

雜上
崇徳院

「雨ふりて玉あるつゆをもち葉の花のひかりと思ひたるな

たまのまこ

玉の箱
卅二家
集實方

「島の子が心ゆるさぬ玉の箱あくれどあけぬ物まぞ

ありたる

たまのまこ

玉の庭
卅一
仲實

「卯花のあらゝみ咲ば山賤の垣根も玉の庭とあるらん

たまのとぞそ

玉の扉
好忠

あゝにりよひー玉のとぞをもゆふべよやへむぐら

はうづもきて

たまのとこ 玉の床(山家)下「よーや君むかーの玉此とことてもかゝらんのちの何
よのいせん

たまのを 玉の緒。命コ(万)七ノ廿七。「うちびさは宮ぢとゆくよ吾ものやれぬ玉のをの
おもひをかえて家にあらまゝを(古) 戀三「志にのこふれはくる玉のをのた
えてみたれん人かどがめを(新古) 戀一、忍戀 式子内親王 「玉のをよさえなばたえねあがらへ
ばーのぶるまとのよこりもぞる(万)十一「うちびさはとやぢよあひー人つまゆ
ゑよ玉の緒れおもひとたきてぬる夜いぞおろき

たまのを 玉の緒。玉ヲヲナギ(伊勢物)卅五「玉のをゝあをよよりてむをば
たえてのゝちもあそんとぞ思ふ(新六)五 行家 「りねてよりたゆといはとおのづか
ら玉のをとけていつのあひみん(古) 長哥 さむく日毎にかりぬは玉のをとらてあ
れちらゝあられとぞれて霜こりり

たまのを 契云玉のをの長くともつゞくれを先の短きものよいへりあかれは志
いのほどいふ心なり(良材集)シバシといふ心也(後撰) 戀四「まぢくらは日のをが
のねよおもやえてあふ夜もかど玉のをあらん(万)十二、廿八「中くゝに人とあらば
桑子よもあらまゝ物を玉のをさかり(いせ物)十四「あかゝよ戀よあぢやくと

こよぞあるべりりたるたまれをほりり(万)十四 東哥 「さぬらくは玉のをさりりおもほ
えてつられあゝろのがくよゆらん(古) 戀三よみ 人しらす 「あふあといたまのをはかり名
のよつひよーの川の瀧つせのこ(拾) 戀一よみ(續後) 戀三(貫之)下、「ぬきとど
るかよとの玉もとまるやと(續) なりたまのをさかりあそんといはかん あふよしも説
たまのを 玉の緒。是ハタヤ短(古)長哥 玉の緒のこトかき心おもひあへぢ
たまのをと 玉緒琴(夫)卅二 爲家 「とぞりかる玉の緒琴のことちかともればおとける
秋のりりぐね(新千) 秋上太 政大臣 「わすれぬよたむけの庭に露とおく玉のをとよよ
のいらべり(拾愚) 中「いへさえよおさふる袖もうちとてぬ玉のをとよの秋のちら
べよ

たまのをと(源わか)上廿 「さゝかがらむかゝを今よつたふま玉のをと
神さびよける

たまのをやあき 玉緒柳(新古) 雜中 西行 「山かけのかた岡のなてゝむるのゝさのひにた
てるたまれをやなき

たまのかんざい(拾員)下「せとなへゝをるもせゝまぬあら露のたまれかんざい
のさまにせん

曾補准言集 卷二十一 十七

たまのよどの 靈夜殿(榮峯の月) 六おはしますほどの戸とづるおとにあるかぎりこ

「おもひやまむねやのあたる音高みたまのよどの」とをどちより(同)七「あり

とてや人のとふらんおくりおき」たまのよどのよそひより物を

たまのよどこ 靈夜床(右京大夫集) 廿二小「まがたこ玉のよどこは塵つとてふる

きまくらとどるぞかあしき

たまのうてあ 玉臺(玉葉) 雜四上東門院 「かたどよもとまらざりけり雲のうへをたまの

うてなどたまかいひけん(六帖) 六「何せん玉のうてあも八重むぐらとへらんや

とよふよりおそねめ(拾) 夏よと(加茂保憲女集) 「けふみれば玉のうてあもかりり

けりあやめの草れいりりのみして(夫) 卅後京極 「百敷やたま乃うてあよる月の光を

えたる秋の宮人(源ゆふかは) 二いづこかさしてとおもふかせ玉のうてあもお

かトおとかり(同) 若紫 廿殿云々よもいと玉の臺よみがきつらひよろづをと

のへ給へり

たまのうそき 玉植木(夫) 廿九隆季 「和泉かるゝのたれ森のちえあがら玉のうそきより

ざる白ゆき(同) 同後京極 「わかさを玉のうそ木の枝とけいくよのひかりみがたそ

ふらん(同) 同爲相 「かべてよのたねともみえぬ梢か玉のうそ花のはおのそがさ

(同) 同爲家 「またしらぬたまれうそ木のおもかたもゆきのませよとるあちをる

(寂蓮集) 「そむ月玉のうそ木のもとさえてこのりれにそあり明の空

たまのる (新後) 釋教 實聰 「そとそめしもとの心乃清けまば濁もそてぬ玉の井れ水

たまのおび 玉帯(夫) 十三爲家 「白露の玉の帯をる垣でし雪かともゆる庭の面かけ

たまのまがた 玉籬(夫) 卅一仙家 「ぬきてそつゆもちとせを契おれてたまのまが

さにうつしうら菊

たまのまゑ 玉聲(夫) 卅二家 集能宣 「水ぐきの跡よのこきるたまのまゑいゝも寒き秋の

頃りあそら 〇此哥ハ貫之がり集たるうとをとれ文がもとへかへたとてよめると云々

たまの月詣 九土佐 内侍 一ひらあとよひかりさめめることのも玉のまゑせいたぐひとぞ

たまの朗詠文詞 白氏 「遺文三十軸軸々金玉聲龍門原上土埋骨不理名文集 卷六

たまのころも (万代) 秋上 長方 「わきもあが花のそがたのをみなへたまの衣やあき

のいらつゆ

たまのあと 玉網(夫) 廿七西行 「天の川かがれて下る雨をうけて玉のあとをささぐま

のいと

たまのきぞ 玉瑕(史記) 龜策傳 白玉有瑕(源柳) 廿いとかうしもおぞえ給へるこそ心

うけれど玉のきせよ覺さるゝも(同 手あらし) 卅 あら御身といみどろあづきても
てかさせ給ふこそくちせしく玉よきせあらんこゝち侍れといふ(榮 月の宴) 十五
よきせつれたらんやうよきえさせ給ふ

たまのぬくへ(古) 物「うつせみのからの木とよとむれとたまのぬくへをぬ
ぞりなすき

たまのみどの(夫) 十四 俊成 「うそそぎや玉のよとの、初霜よまがひてささる白菊の花

たまのそやこ 玉ノ都(夫) 卅 建保三年光明 峯寺八道攝政 「いさぎよき玉の都をいづる日わがた

つ袖のひかりかるらん

たまのみぎり(主二) 中 「むかゝぬ花橘のよほふまでたまの砌のあれまくもを

(長秋詠藻) 中 「君が代をのどかかりとや水鳥もたまの砌よつささくらん

たまのそがこ 玉ノ姿(夫) 三 俊成 「露ぬる春の柳のさは姫の玉の姿と見ざる也けぞ

たまくら 手枕(和泉式部集) 上 「せこがきてふた、傍さむき夜わが手枕を我ぞ

てぬる(夫) 卅(万) 十四よみ 八しらす 「大君のよことかゝこころをいもがたまくらをき

よごちきぬりも(夫) 卅(家) 伊勢 集伊勢 「よもそがら物思ふと泥の手枕をかひさるさこそぞら

れざりけれ(新古) 戀三 伊勢 「夢とても人にかさるをあるといへばたまくらからぬ枕た

よせせ(夫) 卅(信) 實朝臣 「おのづらいく世をふともたまらのあかぬちぎりよひちや
くこさん

補(和泉式部集) 「手枕の袖よ霜のおさるをきさ打見は白妙よしてたまらの
袖のわれ給ひよけるかとの給いせたるよ 「人よき心まりけてのぶをばまく

らとやとるたまらの袖(猶いとおほ) (同集) 公資りめともろともよきてまくらこ

へびいたしるにりへすとてか泥つけてかへしたる 「さびとよあるもうるさ

草まくらたまくらからばへさくらま(同) 「あさのまよ今のひぬらん夢をあり

ぬるとよえつる手まくらの袖(同) (万代) 戀三 「道芝のつゆとおさる人よより我た

まくらのそでもりこかぞ(續拾) 戀四 赤 染衛門 「かこくまもかきひとりねの手枕よいと

あやめのねをやそふべき(續千) 秋下 義鎮 法親王 「秋ふかきとこの山くせ身にきて月影

さむきよその手枕(月清) 稻妻 「そかかゝやあれたる宿のうた、ねよ稻妻かよふ手枕

の露(同) 戀 「見一人のねくさむがそのおもかたよなごか泥やるさよの手まくら

(小侍従) 「のさちかきそかちをかのかをるかようつりよけりなたまらのそで

(愚秘抄) 定家卿 云獨ねの手枕とよめるをある人のつぶや泥侍りかば先人そら

さて、いそれかき難か手枕よふとつあり人の手枕よ我手枕あきば又わが手を枕

よしてぬること侍りあかち人の手枕をかりとこゝろえての無下よちせさく
ぞおぞえ侍る袖枕も手枕もおぞく人の袖まくらわが袖まくらあるべし云々

とまくしのも(新古)増抄云玉くしの柳(一名也)風雅(神祇)「春の日も光ことよや
俊成

てらねらんとまくしの葉まかくるしらゆふ(新古)賀賀「ぬきて不れ玉くしのもの
攝政

露霜天てるひかりいく世へぬらん(風雅)雜上「おのづから猶もふかけて神山の
為家

とまくしのもののころをら雪(新葉)神祇「神風やのどかある世とをら露の玉くし
為忠

のその枝もからさぎ補(續古)雜下「どへりしを玉くしのものをまがくれてもせのく
俊頼

さぐさめちからせとも(風雅)神祇「あはらはき玉くしのものをれ白妙よたつ枝まで
慈勝

ぬさかりてけり(美濃家苞)玉籤の葉の祭の時の柳葉なり(尾張家苞)祭の時といひ
を神前にさしたる賢木を云

補「たまくしろ玉釧。 (記傳)三十七、
廿丁ウ

とまくしの玉櫛笥(夫)卅(万)四「どとめこが玉くしけなる玉くしけめづらしのを
の

くいもよあのせあれば(同)同「氷け流きよめる月影の玉くしけある鏡とぞ
匡房

見る補(忠見)「をら露のかゝるがやがてきえざらば草葉を玉のくしけをらまい
靈屋○榮とりへの七とりべのみかの方は二町をかりさりてとまやとい

ふ物をつくりてついでひちかごつきてこゝにおそしませんとせさせ給ふ補今世よ
いふ御靈屋○一條天皇の皇后宮のかくれさせ給へるを、さめ奉る所なり

たまやあぎ玉柳(催馬樂)高砂「たりさでのさいさでの高さでのをのへたてるを
具氏

らとま椿玉柳云々ねりときみをのみぞかけしせん玉柳云々(夫)三「みさびこを
具氏

起もふしけれ玉柳ひまかく枝のかよびくらん(温叟詩話)注漢苑有柳如人形号曰
二

人柳一日三起一眠補(玉葉)春上「さねひめのうちとれがみれ玉柳ともる風のけ
匡房

づるかりけり(同)同俊成「玉やあぎよふともあき枝をれととりのいろのなつか
俊成

したかな(万代)春上「青よよしの都の玉やあぎいろにもしるく春のきにけり
定家

(同)同よみ人「谷風のふれあけにたてる玉柳枝のいとまもみえぬ春哉(月詣)二
伊綱

「玉やあぎ枝もうこのぬ君が代よあびくや風のしるしるらん
ならさ

とまつがえ玉松ヶ枝(万)二ノ「三芳野の玉松がえのしきかも君がとおとをも
十四

ちてりよそく(玉葉)冬「春をらぬ花もとよとやみよしの玉松がえよふれる白
長方

雪○玉椿玉柳の例よて玉松といへるり宣長が説し山の誤りかり玉松といふまとの
なしといへり

とまつる玉祭(花詞)冬「好忠」十二「たまつる年のをのりよかりにけをけふ
○靈

よや又もあひんとせらん

たましくくせ 玉巻葛(後拾)秋上「あさぢ原玉まく葛のうら風のうらかあしりる秋

の來より 葛カツラノ手ハ玉ノヤウニ(散木)上ノ晚風如秋「夕されば玉まく葛の

うら風をまかへる秋と思ひけるりか(千載)夏野の草を「やれをてしふる野の小野

のまくせ原玉まくせかりかりよけるりか(夫)八千五百「まくせ原玉まくかせやま

さるらん葉よおく露よはたるとぶかり(六帖)四「秋そぎの玉まく、せのうるさ

うるさわれをかあひをあひも思せせ(山家)下「すぐるふはあくれが下のくせまは

をふきうらりへは秋の初風(新千)春上「ちぎりおけ玉まく葛のそた露やうらとよへぬ

さてトかへるかりがね(新拾)戀五親「秋風よ玉まく葛のそた露やうらとよへぬ

かえたるらん(奥儀抄)云たましくとにくせのかづらてハ玉のやうよまはせへた

ればかり

たまふ 常ハ人ヲアガメ(万)卅十五「我せあがりへりきまさん時のため命のおさん忘

れたまふ(源常夏)初つり殿よ出てせせ給ふ中將の君もさふらひ給ふ(万)廿五

「万代よいましたまひてあめの下まをうたまひねこのとさらはせ

たまふ 賜。たまひる 前に別に出す

たまふる 自ノ上コソヘテイフ詞ニ 給へ 所コクハ(源常木)廿此見給ふるわたりよ

り(同すま)五のゝる御事と見給ふるよつけて(同末つむ)廿もてせかれたる御心を

へ見給ふる人さへ心ぐるしく(同は、さ、)四随分よよろしきも多かりと見給ふ

れど(同すま)五思ひ給へよらざり御ありさまを見給ふま(同は、さ、)四十心

ゆかぬやうにかんさ、給ふる(同藤袴)八いととろくかん聞給ふる(同浮舟)九

いとたふとくおきてられたりとかん聞給ふる(同さかき)四十今をトめて思ひ給ふ

るおとよもあらぬと(同わか紫)卅世間の道理をれどかかひ思ひ給ふる(同常木)

七いかで尋ねんと思給ふるを今にえこそ云々(同廿)廿よ死ふいかりと思ひ給ふるよ

(同ゆかほ)四十口さがなくやと思給ふるをかりあかん(同七)四十思ひ給ふるよ

くちどしく侍るごさかな(同若紫)廿御供いつかうまつり侍らんとおもひ給ふるを

(同廿)廿御とさきのつ、まーさに思給ふるさまをもえあらそして侍らせかりよ

を(同)四御四十九日過ぎてやあとと思ひ給ふると聞めれば(同すま)七あづさひ聞え

ぬ月日やへた、り給ひんとおもひたまふるをなん万のおとよりもかあしうまべる

(同ゆかほ)卅人よもらさとと思ひ給ふまは惟光おりたちて万のものにはべる

(同少女)廿おやつかあさへどてかくところ思給ふれ(同みをつくし)廿うしろを聞

えんとおん思ひ給ふアルハ誤也古本ハ（同蜻蛉）廿物のまかきからんとおもひ給ふれば今本給へまバ誤リ也

たまころも玉衣（夫）（同）卅五百弟子品心 雅有「たまころも身ぞをかれまときけを不ひのりみねをやありとしもあき

補玉こゆる（金葉） 俊頼 「風ふけばそはのうきまよたまこえてまぐりくかりぬひぐらゝのあゑ

補たまこせけ（千載） 戀四 道經 「うづらかくーづやよおふる玉こせけかりにのこ来てかへる犯まかき

たまさか（遊仙窟） 邂逅（同） 十寓遊勝境（拾玉） 一「たまさかよ花咲桃の君が代にあらてふあとひ千さびもたび（六帖） 三「陸奥ありといふある玉川のたまさか

かよてもあひみてーがき（同） 九上「たまさかよあひみそめてのかけろふのそれりよとそた思ひまゝ物を（忠見） 十二ひかしりたらひし人の年比ありて（六帖） 六「たま

さかよけふあひみれま（六） の國たまさかといふ所にありなるを（六帖） 六「たまさかよけふあひみれま（六） の國たまさかといふ所にありなるを（六帖） 六「たま

てもありとたのめばたまさかの神のそかあるそとよもありけん（小大君） 廿「ちかひ（朝忠） 卅（續古） 哀「めめろとぞわびてのおもふたまさかよとふ人あれやまよさ

むる（續） めぬと（うつほ 藏開） 下ノおそろろの折し物の音出さばされとたまさかよあまつりまつりあそびあど（同 國讓） 中ノたまさきりよ里よおそまはるぞ今忌を犯侍り

かを参り来て 云々（源は、さ、） 廿五 ひさしきとぞえをもちうたまさかある人とも思ひさら（同 末つむ） 九ノ このたまさきある御けしきのまつかききをバ（新古） 戀一

「きのくよやゆらのみかよひろふてふたまさかによあひきてーりか（源 手習） 五十山への平る人ありとてもこかこのまちよいかよふ人もいとたまさかあり（枕）

五ノ人もあひなんとおもふに更よあやしき法師あやしのいふひあきものゝみたまさかよみゆるいとくちを（源わか紫） 卅七 をかききくざりの御りへりのたまさ

りかりしもたえそてよたり（日本紀） 十一ノ 適逢（同） 廿三遇 同（同） 廿四偶 後拾（小辨） 「たまさかよ逢ことよりのもさかまのけふ祭るをやめづらとみる（新續古）

戀五 「たまさかよあふことのもかれぬれば冬あそこひのうらまかりけれ（信明） 俊忠 「たまさかにまことやまると君からぬ人てよをもちらせてーがき（万） 十一「玉

坂よわが見し人ぞいからんよをもちてり又「目見ん（後拾） 春上伊「うづらつ

きつまゝしき玉さきりみぐとふひのわりなりけり（竹取） 上十年頃見え給いざりけるかりあれをかん玉さかるといひまどめける 云々 ○野洲良云魂放の義

よや

たまき (推古紀) 九如環无端ヲ訓ニハミ、カチトアリ (和名) 二四ノ講多末岐一云小手也 (仁徳紀) 廿抱手纏而縊死 (三代實録) 手纏二百具。共ニ宣長ヒケリ (万) 十五、廿九つこのたまきの玉をいへづとに (夫) 卅一 一妹がくるいと井の里のたまきやまよりよりこゝにやどりぬる哉 (四季物語) 正月 小車のとゞまることかくたまきのまゝなきたためし。 まづたまきの別物あり

たまき いる。真淵の説たまの魂也きいるの極まで人のがらふる涯を遙にりていふ語也といへり (拾員) 上「たまきいる命をまもいらぬ世まいふまもたらぬ身をばあやかき (万代) 哀傷 家隆 「たまきとる命のちぞかぎりつれあさをつきあしといひてあへて (新六) 四衣笠 内大臣 「たまきとるいのちぞかぎりつれあさをつきあしといひてあひやまめや (古事記) 下ノ多麻岐波流字知能阿曾 (万) 卅七 靈剌内の限りのたひらけく (夫) 十三 定家 「秋の月たまきとるよのかゝそぢまあまりて物のいまだぞかあしき (万) 八ノ「玉きいる内の大野馬あへてあさふまはらんその草ふらぬ (拾員) 上長月や老せぬ菊の下水よ玉きいるよのよそのしら露補 (万代) 雜一 忠兼 「たまきいる命もいらぬ秋のきてことしもかあし萩の上風 (同) 雜四 顯仲 「玉きいる命もいらぬわかきぬる人をまつべき身こそおいぬれ

る人をまつべき身こそおいぬれ

たまぎぬ 玉衣 (夫) 九長永三年云々 「白妙の露の玉ぎぬうへまきてからあでしこの

花やねぬらん (万) 十四 「珠衣のさるくくづみ家のいもは物いそぎ死でおもひかねつゆ

ねつゆ

たまき (山家) 下「いとそよやさらまこゝろのおさかくてたまきれらるゝこ

ひもそるかか

たまゆり 玉床 (夫) 卅二たがひて 「玉ゆりのおまゝのまゝまどふれて心のかぎぬ

君ならまども (散木) 中ノ六 「たまゆりの花のいとねまいつくしき君をへへてま

まどまねん (夫) 十 俊頼 「たかばたの天の玉ゆりこよひさへあがれやをらんあかぬ

かまどま (千載) 羈旅 崇徳院 「松がねのまくらも何かあたからん玉のゆかどてつねのと

こか

たまゆら 心也 (神紀) 卅四 瓊響瓊々此云乎奴儼等母母由羅爾緒瓊之音毛眞揺々ノ

心ト云 (古事記) 上ノ奴那登母母由良爾 (万) 十一 (人丸) 下ノ (六帖) 七 (風) 戀 「ま

まゆらまきのふのゆふべ見し物をまふのあしこふべきものり (畧解) 十一ノ上

記ニ手玉玲瓏ヲタママモユラ瓊響瓊々ヲチヌナトモユラトヨミ此集卷廿手取か

らよゆらぐ玉の緒ナドアルヲ思フニ物ニ付タル玉ノ相觸テ鳴ル音也サテ其音ノカ
スカナルヲ以テ少ク乏キヲニトリテカク云也後ニ露ノ玉ユラナド云テシバシバカ
リノヲニスルモ幽ナル意ヨリ轉シタル也(堀初)郭公「久かこの天のりぐ山はと、
ぎはさまゆらさかき雲のまよ〜(同)雪師頼「かたくら〜玉ゆらやまきふる雪のい
くへ積りぬこ〜の白山(同後)七夕後朝(夫)十一「朝風は川をみささけ一夜づま玉の
らたよも立かへるべくとまる(夫)廿三「夢の夜の玉ゆらもか〜玉く〜け二見の沖
よあくる月影(新古)哀家「玉ゆらの露もか〜とどまらせかき人あふる宿の秋
かせ(新勅)雜三後「せり思ふまひか〜山陰は玉ゆらか〜る朝がほのつゆ
(風雅)秋中後鳥羽院「つゆあき鳥羽田の面のあきかせ玉ゆらやどるよひのいさづま
(方丈記)いかるわさをしてかたせしも此身をやど〜玉ゆらも心やなくさむべき
(夫)廿六「るなみ野や野中の清水むをぶてのさまゆらま〜さ〜の上露(月清)
上「みされあ〜のつゆの玉ゆら船とめてるの〜ま江にま〜む頃か(同)九「秋
の田れいささの露の玉ゆらもりねさび〜山陰のい(續後拾)春上後西園寺入
道前太政大臣
「風ふけハ柳の糸の玉ゆらもぬさとめがさき春のあき露(月清)四「露とぐく玉く
〜のその玉ゆらもり〜たのこのわかれやをさる

「たまごづ(好忠)正月「峯は日やけさ〜うら〜ま〜つらん軒のさるひの下のさまご

づ(堀初)春雨肥後「つれ〜とかがめてぞふる春雨のをやまぬそらの軒のさま水

「身からこそとよもかくよもあくがれめかよむ玉のをたえたよをかとてまら
せされば「よにもとああくがれにさるたまかれはうらあきつまよとまるものい

「たま〜づめのまつり十一月中(公事根源)それ人魂魄の二のさまあり云々此祭ハ
離遊の運魂をまねきて身体の中府まらぶむる功能あり宇摩志麻治命の時よりおこ
る云々

「たま〜く(夫)廿三(万)十八「堀江は玉〜かま〜を大君のさふねこがんとかねて〜

「百敷や玉〜く庭のさよき瀬はひかりをそへてやどる月哉(同)同家集「あれは
る高つの宮のあさぢ原を玉〜きのむらさめの露(同)十二「夕露のさま〜く小田
のいかむ〜ろかへをそさる月ぞやどれる(月清)三「おく露をそら〜で見れば

「たま〜ひ(魂)源末摘廿七父〜このう〜ろめた〜とさ〜へ置給ひん〜ま〜ひのさる

べかめりとぞおぼさるゝ(夫)卅六爲家「いつまでかりとちよやさるたまひのそなれぬをどをありとたのまん(うつろ)中納言詞もとよりおろか侍るうちに年比魂もかく物覚えを侍りて(同)中七十九七さもせんうさかくまどそれ侍りかば魂をまづめんとさびくさ御文一くたりを見たまへんと兵衛をせめさべりか(遊仙窟)精靈(夫)八行「おぼえぬをたがさまひのきたるらんと思へば朝は螢とびかふ(兼盛)「わがまひよさぐへてやり玉ひのかへりごとまつはどの久しさ(榮)うらくのわかれ)中納言こそかこくおそせせかりしけれをたまひおのそかいかさぞきまえける(玉葉)雜五定家「玉ひも我身よそのぬがげきして泪ひさしき世にぞふりよ(元真)「このれよしをぞいさえよたまひのしをしいくの野べよやどれる(玉葉)戀三興風「こひとも今のおもむき玉ひのあひまぬさきまかくかりぬれば(元輔)「ささりよもゆき過をやめ故郷のさくら見せてかへるさまひ

たまひ 常ノ敬語ナガラ詞ノ間ニハサミテ云詞(源すま)四見給ひからぬ御心ちよ故イサカ書ツク余ハ例シテシルベシ見ナラヒ給(同玉萬)初こころくある人のありさまをも見給ひかさぬるよつれハヌノ心也(同玉萬)類たまふノ所ニても見カサテ玉給ひて給さんノ類附ス

玉日りけ(夫)卅玉ノ部

たまも 玉藻(夫)廿九家集貫之「いつのあもけふをくらして飛鳥川わさりてそやくたまも

かづりん(同)永承四年伊勢大輔「池水のよまひさくをぬれば底のたまもひかりと

えたり(同)同榎子内親王家哥合美作「春の池よひとへのこれる薄氷あをむたまもかくれざりぬぞ

たまものところ 玉藻床(新後)冬法皇御製「あがもの玉も此床のうさまくら定めぬかこよまらせてぞゆく(新拾)冬隆房(新後拾)「霜またようを夕のさめるあが

もの玉藻の床よつらゝるよなり(新勅)戀二式子「わぎも子が玉もの床よよるなみのよるといかにをさぬ袖をか(千載)冬顯輔「難波がさ入江をめぐるあし鴨のたま

ものところようさねをらも

たまもる (和泉續)田守宅の人のあたるよ本集たまもる家に人のあたる所

たまにどれ(拾)戀一よみ人「玉をどれ糸のさえまよ人をみてまける心のおもひか

けてき(夫)卅二衣笠内大臣「たえそてふりぬる宮の玉をどれとよさよえをかりよるかか

たけ(嶽)万廿五このさなよひれふりけらまつらさよひめ(和名)一嶽高山名也

美太介(源若紫)四ふとの山あまがのさねあどりまよゆるもあり

たけて關。姑 **たく** ノ所ニ出ス

たけ葺(夫)十五「まつがねのさねかりゆねばもみち葉をそでにまきいる、やまお

ろいのかせ

たけホド(夫) 卅六西行「物おもふ袖はあきさのさねえて志のおあらぬのかとど

かりたり(同)「ものおもふ心のさけぞいられけるよあ、月をながめあゝして

補(月清)上「うき世といつともさこそ思へども心のたけを月よりぬる(壬二)

中夏五「みねにおふるあれの千年をまつかひのおよぶたけあき夏の瀧つせ

たけ人のセイ 段 **伊勢物** 廿三「つゝるづゝるづゝにかけしまろがたけをぎにけら

あいも見ざるま(源ゆふかは) 初たけさかまこ、ちをる(同) 玉かづら 十たけさ

くるさけ 別ニ **る** ノ部ニ出ス

附たけさち(うつろ) 初秋 下六 十たけたちよきそと姿のきよらることさらなる

びさ(大和物) 六たけさちいとよきそとある人の髪さねさかりからんとみゆるが

源うつせみ) 九けしうのあらぬおもとのさねたちうを(同) わかあ 下ノ 舞人のあふ

のすけさものかさちきよとさねだちひとさかぎりをえらせ給ふ(同) みゆき 三

隨身馬をひのかたちさけたち(同) 十君たちいとあまさひきつれて参り給ふさま物

ものうたのもあけかりたれたちをさるかま物し給ふふとさもあひていとさう

とくよおも、ちあゆまひをさ大臣といもんよさらひ給へり

附たけさちタケト姿トニツ 源 みをつくし 廿みづらぬひて 云々 たけをがたと、

のひうつくしけまて

補たけ(万) 十六「たけばぬれたのねばあがき妹が髪このころ見ぬまかされつらん

か(同)「人まをいまいながしとさけといへど君がみりみとされりとも(同)

七ノ八年兒の髪多久麻庭爾ならびをるいへよもとえせ さぐ (万) 十一 前に出 たき

補(同) 十九 いもせ野 馬太伎ゆきて

たけさち竹柱 (夫) 卅喜多院入道 「けさこれば木曾のふせやの竹をいらさわむを

かりし雪ふりよれを(同) 同久安百 「をがやふくく、めやうたのたねをいらふよ

からぬの旅ねかりたり(同) 卅五寄働 備懸為家 「大井川さしのとまやの竹をいらうかりふ

しや限をるらん 補 (山家) 下「よ、ふとも竹のさしらの一すぢあたてさるふしのか

さらさらかん

たけかき 竹垣 (夫) 九經 家卿 「日數ふる雪しをる、こちして夕がなされるしつが竹

がき(同) 卅一「山賤のへたてまひしく竹垣のわれくたけても世をやんぎまゝ(同) 爲家 すこいけい
同 卅一「かた山の里のたかづきあそめよりもりくる秋の月れさびさ

たれからぬ とけう 九けくノ所ニ

たけあひ(朗詠) 更衣 宿釀當招邑老酣

たけうま 竹馬(夫) 廿(新六) 五 知家 「竹馬よおきふいかれしそのかまのよゝいふれど

もわそれやのたる(同) 同家集 さがあ住けるにたはふ れ哥人くよみけるに西行 「たけ馬を杖にもけふいたの

む哉わらのあそびを思ひ出つ 補 (袋草紙) 壬生忠見 云々 竹馬よ乗て可參之由有御

詠 云々 「竹馬のふいぐちよいていとよわし今ゆふかたにのりてまゐらん。 古代ノ竹馬ハ

葉アル生竹ヲ馬ニセシ。唐コテハ後漢骨董集ニクハハクイヘリ。ノ時竹馬アリ

たれのは 竹葉(夫) 卅二久安百 「竹の葉ふまがきの菊を折そへて花をふくらん玉の

さかづき(同) 同 俊頼 「たけの葉ようのべる菊をかたふれてわれのこゝづむかたきを

ぞもる 補 (玉葉) 戀二 和泉式部 「あのをめよおきてわりれし人よりの久しくとまる竹の

葉の露 是ハ常ノ竹葉アリ

たけのまよりれし衣(夫) 廿八 家集六 條院宣旨 「竹の葉よりけし衣のおおりの虎ふ野邊

もむつましきかか(同) 同隆祐 朝臣 「竹のまよ衣をかけしいよへの人の心のあき世を

りたり(拾玉) 二 「衣をば竹のさえたにけおきて虎に身をたしひとぞいぞおもふ

(宇治拾) 七ノ 六秋 「これが身のさとの林にあらねどもさざかおろもをぬぎくるりか

(金光明經) 捨身品 摩訶薩埵園中を過給ひたる時虎の子を産て餓るを見て衣をぬぎ竹の枝よかけて虎よ身をあさへさる故事也

補 たけのまやま (新續古) 秋上 無品親王 「その色とわるぬ哀も深草やさとのま山の秋の

夕暮(新勅) 秋上 家隆 「ふとわけん物とも見え朝やらんとけのまやまの霧の下露

たけのまやま 竹林(万) 十九 四 十七 「みそのふの竹のまやまは鶯のあをさきよしをぬき

いふりつゝ 竹の戸(夫) 卅山家 顯氏卿 「ふいかれぬるをばゆるせ竹の戸に風も夜寒の時も

きぬらん 補 たけのあみと (散木) 「夏くれバいくよくひあまはかられて竹のあみ

戸をあけてとふらん(拾玉) 四 「夕されのながめを人やあらざらんさけのあま戸ま庭のまつかせ

たけのともしび(夫) 十八 六百 季經卿 「あまさゝび竹のともしびかゝたてぞ三世のふと

の名をばとあふる

たけのりれひ(夫) 卅三 爲家 「山もとの竹のりれひをもちる水のわりあき世ぞもそとこ

るかを
たけのよりつか(夫) 廿一法 眼慶融 「うきまゝは竹のよりつかうちまへて小舟からぶるふ
下の川浪

たけのさい(右京太夫) 七十まざらある犬の竹のたいのもとかどありくよ

たけのその 竹園(夫) 卅五喜多院入道二品親王 「色かへぬ竹の園ある鶯のいく万代
の春をまつらん(同) 同家 「みどりある竹のとのそのの万代よをちもとときそのの
ぞちつらん(同) 廿二光臺院入道二品 親王家五十首家隆 「竹の園まがきの菊のよほふ袖いく千代露よ
ぬれてははらん(新後拾) 雜下よみ 「さもこそ竹のそのふれ末をらめえようきふ
いのなどいけるらん(玉葉) 賀助 「つかへつゝ行を遠くこのむか竹のそのふよ
代々とかさねて(つれく) 一段 竹のそのふの末まで人間のさねならぬぞやんで
とかき(史記) 五十 梁孝王世家索隱曰今城東二十里臨新河有故臺址不甚高俗云平臺
又一名脩竹苑(散木) 云々 竹風如秋といへることとよめる 「秋きぬと竹のそのふよ
かのらせておのゝとふゝき人さかるかり(月清) 二 「吳竹のそのよりうつるさるの
宮かねてもちよの色にえよき

たけのつゑ 竹杖(後拾) 賀前大僧正明尊九十賀し侍りけるよ宇治前太政大臣竹の杖

つかいける返りごとよと侍りける

たけのうてを(新續古) 賀左大臣 「君や今かそらぬいろよ契らんたけのうてかの万
代のかげ

たけのまがき 竹籬(夫) 廿(新六) 一衣笠 「霜おれば一夜二夜ようつろひぬ竹のまが
きのちらぎくの花

たけのこ(筭(赤染集) 一筭をさき人よおこせて「おやのさめ昔の人いぬきける
を竹の子よより見るもめづらし」 「ゆきをわけてぬくこそおやのさめならめて
いさりりあるためとこそさけ(いせ集) 十うめの木のゝとらあるたかんをぬく

たけのさえど(拾玉) 三「いろあへぬ思ひのそこをあれとや竹のさえどようぐひ
そのかく(同) 六 「風をよとにはよ玉をしくあられたけのさえたよ音ぞけそよき
(新後拾) 雜秋 親文 「木よもあらせ草よもあらで咲を竹のさえどよふれるよらゆき
(月清) 上 「過ぬるの嵐よとくふむら時雨竹のさ枝よ聲のこりて(夫) 廿八 光俊 「岩よ
そふ竹のさえどのいたれるやねよゆく鳥のとまりをるらん

たけのめと 竹弓(頼明集) 「おもとせや手あらは弓よふは竹の一よも君よとを

見いれ給ひでさむかりおぞし入さりし身と今までおくらか給へるが心うき事と
哀れにもおぞし出て云々(同)二ノ下。大將の源氏の君と御汗も涙もひとつは流を
まさりてたけき事といいとくわびしきめを見せ給ひそとおぞしいりたる御けし
きの

【とけし】猛(竹どり)十とけく思ひつる宮つま丸も物におそひたるまゝちしてうつぶ
印本ナシ

しよふせり(同)同相戦んとせるともりの國死人來をばとけき心つりふ人もよもあ
らト(古)序とけきものゝふの心をもあぐさむるの哥あり(夫)廿二、よミ「ものゝふ
の八十字治川れえびを島おちくる水のたけくもあるのを(神代紀)上、廿有武健陵物

之意スヘテ此動ク詞ト同とけくト同

○たけく俗ノテキタコトデキタコトデモナイニアタルカ(みとつくし)ノ注ニ宣長云利

運ニ思フ也スベテ此たけくトイフ詞注譯シガタシ所々ニ考合セテミ
ツカラ心ニアザハ知ルベシ注ヒガト也(さかき)ノ註ニ宣長云強クヨキトモアラテハ
ト云心也此詞皆此意ナリ又たけき事といねをのみなき給ふナドイヘル所アリソレハ
タビヒタスラコ泣トチイヘルニテ泣ヨリ外ニハ(源 湊標)十けにかくおぞしいづを
ツヨクヨキシカタモノキヨシニイヘル詞ナリ(源 湊標)十けにかくおぞしいづを
りりのおぞりとゞめたる身もいととけくやうく思ひかりけを(うつぶ 櫻の上)上、
一 女御の君の心春宮おそせせ後にもなり給ひぬを心よからせおぞしに大將のあ
りさまかち御門と申をともしろひがさくおぞしたるを少したけく覺はよ云々

(源 わかな)上、九わがそくせのいとたけくぞ覺え給ひける(同 蓬生)十かゝる御あり

さまよてたけく世とおぞし(榮 玉のうさり)十御こゝちいとゞまさりてまどろませ

給ふ事かたゝかゝりつかうまつれたる人くもさなくおもへどあまりまかりてね

ふりがちあり(狭)四ノ下さりともしつゝ見をち聞え給ととたけうおぞさる

る物から(源 楨柱)卅一の宮よもさこそたけうの給ひりいとどろおぞしとふれど

さえておとづれせ(後拾)雜三山にのぼりて法師になり侍「何りそのこのいろよ

もさけからん心をふのき山よませよ(拾遺)七物名まつ「いとへどもつらさかこ

とど見ると死のまづさけからぬぬおそかるれ(散木)上、五(堀太)露「あさひさに

どがいの死りのむらさえてたけのらぬ身よ世残ぞうらむる(源 さうき)五あさけな

うもてあさんよもたけりらねばとかう打おけきやをらひてゐざり出給へる御けそ

ひいと心にくく(蜻蛉日記)上、十たゞ死ぬる物よもがかと思へ心よかかそねバ

今より後とけくのあらせともたえてとえぞたまあらんいとど心うと思ひてあ

るよ(源 うす雲)十とまさりててものやうよふりそへ給へるこそたけきこゝちをれ

とおもふべし(同 藤の裏葉)二心つよがりたまへとたけからぬにおぞしわづらひて

(同)十二が方とけう思ひがほし心おぞりて(同 夕きり)十この御名のたけからせも

りぬべきを(同)八廿さるゝたかきものまもられまふの御さめよもたけから
せや(同)七廿なまのたけき御名にかあらん(同)常夏二十何のおぞえかひさけりらん
(榮月の宴)一卅御こゝろさゝのまことよめでたけきはたけからぬ御ひとそぢをおぞ
さるべ(風雅)戀四太上天皇「まち過は月日のほとをあぢきかゝたえなんとてもさけ
からト身を

たけをぐさ(夫)六十(新六)一「冬きていあねこが圍の竹箆がたいくよねさめの風り
さむけき(同)十七忠房「ひまをあらま竹のそがきの下さえてよか〜ふるのそぞれか
りけを

とふ塔(万)十六十八「香ぬれる塔にあよりそ川ぐまのくそぶあそめるいたためやつこ
(源蓬生)廿昔物語よふこぞちたる人もありけるぞ(榮駒くらへ)十多寶の御塔を
一尺をかりに作りみがきさてさせ給ひて(赤染集)寶塔品「大空にたかられたふの
あらされて法のさめよぞさをいわけゝる

とふ若契云そのあたりにも當ノ矢ヲイルトイフガゴトシ宇治拾遺ノ書入ナホ落ク
やに多シ〇案ズルニ此契説ワロシ俗ニ意趣チカヘス返報ノ意ナリ
(落窪)四おれがたふにいとどくてうとふせて後よの悦ひまどふさかりかへり見さ
やとかんおもひいかバ(同)二いとむねいさうかくさまとよねたき答をせられぬ

ることを(四條大納言集)「たふさきいくるさき物とからいして人のうへをば思ひ
あらかん(枕)十八いとどうこれのと思ひておたりがほある人そりりえさる女どち
よりも男のまさりてうれしおれがたふの必せんせらんと常よ心づかひせらるゝも
どかしきよ云々(宇治拾)廿三ノ汝むつかいがりてその僧を追むらひてたそれよこの
僧あくしんをおこしてわき此國の守よかりて此答をせんとして生れて此國司とかり
てけまバ(同)廿四かあしきめをこそせいかバその答よあおりおろさんさるぞとて火
を山のごとくとたけければ(盛衰)廿四ノ答の矢を射その敵を討捕て(長門平家)八のあ
しうたふのせられり

たふと若和(長門平家)八これをいらせしてぬけ〜ととらきてさふこせせられさ
るこそやまからぬ

とふのそい若拜。コタへノ禮也(花)拜賀ニ來ル人ニハ主人南階ニオリ下リテ答拜揖讓ノ
作法アルナリ(源やどり木)七十おりてさふのそい給ふ

たふ賜也(續紀)廿二太政大臣止之仕奉止勅部禮數々辞備申多夫依豆受賜多婆
(同)廿一朝廷助奉利多夫事乎(雄畧紀)六人名香賜此云舸拖夫(万)廿乃多婆久〇宣
長云このもさらたのそまひをたびたまをさむたまへをさべたまゝるぞたさ

るといふ類也(源寄生)七十布かといふ物をさへ召てたぶ(土佐日記)と舟よりおろせさぶ也朝ぎたのいそぬさたまつあでそやひに(同)神もよみたび(宇治拾)七ノ質のこぶかへーさぶぞとて今かたくのかはまなつつけさりぬれば(万)十七「吾聞一耳によくにばあーのびのあいなへわがせ勤多扶べー」

附 たさん

賜ハツノ約也(うつ布 初秋)下七。王昭君さりとわかれをものゝふにささんやの

このまよ(同 藏開)

上、一宮あて奉りつるかそらけもたさんとして枕がみま打置て二所

ふー給へり(同)

上、四此朝臣さもの志を物やあそびとて制してたさねばまた

あそさべゑそねバ

云々(竹取)十勅命此女も奉りさる物からば翁よかうふりあど

かたせせざらん(枕)

四ノ常陸介聲引つくろひて佛の御弟子よさふらへば佛のおろ

したべと申せ

云々(同)五、まろがもとよいをかかけなるさうの笛こそあれ云々

僧都のそれの隆えん

またうべ云々○凡て(たまふ)下同賜ト給ト給トオノカ上ニツ

へ、テイフト

食スルト四様アルカ○たうぶたうび賜フニモイフベキカ(竹とり)五竹

とりとよび出して

むせめを我またべとふーをがま(催馬)應子「さうのあひまろま

さうをらん手に

をゑて云々

とぶ

飲食スル(うつほ 忠こそ)廿ものもえたせてつりれふ(夫)十一能此哥の九月

はありよ人々あまのまうできて酒あどさぶるついでよ云々(續紀)卅ノ黒記白記乃

御酒食 倍

惠良伎(後拾)雜三ヒガキ詞書云々水さべんとて打よりてあひ侍りければ

云々(枕)

四ノ常陸こと物にくそで佛の御おろしをのそくふがいとたふとき事か

かといふけしき

とて尼詞あどこと物もさべざらんそれがさふらひねばあそと

り申侍れといへ

バ(うつほ 藏開)下ノ仲正詞ひと日あさましくたべゑひて對面給ひ

りけるを(同)

下ノ兵部卿のまこのし給へるよ更まをべて物も覺えきたべゑひよ

けりや(拾)

雜按察の更衣の局より松を箸よてさべ物を出して侍りけるよ(催馬樂)

酒飲 酒をたう

べてたべゑうて(古)夏さふらひよてをのこさのさけさうべけるに

(同)離

云々うへのをのことも酒たうびけるついでよ「もろともよ云々(同)同かん

かりのつ

云々おほま死をささうべて云々(後撰)一殿上まかりおりあんとしける

よ酒たう

べとるついでよ(宇治拾)七、大柑子をこれのどかこくらんたべとて三ツい

とかうを

しき陸奥紙よ包とてとらせさりぬきバ(たうぶトモ動カ)うつ布 藤原の君

四十 おさ

かさべんものゝまつほとよとりよそひーの

附 たうぶ

常ニ人ヲアガメ(源をとめ)八おろしかいもとあるトそあたまひさうよ侍

りたうぶ(同)

九かり高しかりやまんをあたまひさうかり座をひきてさちさうびあ

んなどおどいふもいとをかり(土佐日記)とせべのゆきまさらかんたちより出
さうびー日よりおゝかゝおにおひくる(源常夏)廿一妙法寺のべたう大とあのうぶや
は侍りけるあえ物とかんあけき侍りさうびー(うつろ 嵯峨院)四ものゝかためと侍
りたうお人あり

附たうぶ是ハ給ヘ給ムルナドニ同ク自ノ上ニうつろ梅の花笠廿桂川己さり興

ある所をもて侍りたうぶをおまかん花見給へんとて日頃侍りたうぶあり(同 藏開)
下十かく申せべりたうべ云々あくねんふかく侍りたうぶらん

たふとく尊貴(夫)卅四建長「たらちねの親のつくまゐる三芳野のよゝ野の神の見る

もたふとく(神代紀)下ノ「赤玉の光りのありと人のいへど君が譽贈比志多輔妬句
ありれぞ(竹とり)下ノ翁勅答詞 此十五日よかん月の都よりかくや姫のむかへま

うでくあるさふとく問せ給ふ此十五日よかん月の都よりかくや姫のむかへま
とらへさせんと申は(源ゆふかは)卅あゑさふとくて経うちよとたるよ(万)卅たふ

と死物の酒よあるら(源若紫)三いとさふと死の大とおなりれぞ(同みのり)初
後の世のさめよとたふと死事どもをおおくせさせ給ひつゝ(同はし姫)十さびーき
御さまよとふと死わざをせさせ給ひつゝ(催馬樂)呂あゑさふとけふのたふとさや

補(河社)云此さふといたのーきせいへり日本紀は貴盛をさのーともさふとーとも
両方一點せり○守部云今日の愛く好きと云

さふとむ尊(源夢の浮橋)初さぐれ給へるらん物一給ひれりと見給ひてよりこよ
かうたふとび給ひて(同はしひめ)十法文かどよとからひ給へばさふとび聞えて常

よまゐる
たふる牛馬ノ死(和名)十斃多布流

さふる倒(拾玉)一世ぞわさるこが身のさまのよこをさたふれぬものゝ我身を
りれり(源はたる)卅たふるゝかたよゆる一給ひも一つべかめれど(狹)一下荻の上

風のあらゝり吹こゝたるに俄にみさをたかくふきあやて木丁もたふれぬれどと
とよ引おち人もか(源よもさふ)五八月野わきあらかり一年廊ともゝとささふ

れふ(同あふひ)九又尼かどの世をそむきなるかともさふをまどひつゝ物見にい
でたるも(同ゆふかは)十きぬの毛を物に引りてよろずひさふれて(續古事談)

一藏の中は佛像ありけぞ五ヶ日をへて風ふたふしてけり
たふか踏歌(源神)注女たふりの毎年正月十六日男さふかの正月十四五日也毎年ハ

か(年中行事歌合)貞「このとのゝ聲さへさめる雲ありかかさのここのゝろさ

月夜(源さかき)三四十内宴たふのあと聞給ふにも(同 榎柱)廿男たふかありれば

たふ(宇治拾)十孔子云々馬のり給ふよよくおくしなるよや轡をふたゝひとり

とづー鑑をまきりよふみとづを世の人孔子たふれをといふあり(源こてふ)十戀の

山にいくトのたふ(歷朝詔詞解)光仁帝寶龜二年二月己酉永手大臣薨トキノ詔逆

言加狂言乎加トある所の注に狂マハと訓べきことの書紀ハ狂心此紀の詔どもハ

くかとふを(万葉)廿多波和射と有なと是也これら頑狂狂態也云々補(万)十七、四

とふれたる一こつおきかの醜翁

とぶらか(源)かしハ木ハ十日頃もかくかんの給へどさけかとの人の心とぶらか一

てかゝる方ハすゝむるやうも侍るなるをとて

とふやか(盛衰)四十一さハとふやかハ取て佛前ハをかへて

とぶて飛礫。ナリナリ。(万)八ノ三「とぶてハもかたハつべき天の川へどてればか

あまたすべなき(落く)中將どの、人々えひきやらぬかをとてとぶてとあぐれ

バ中納言殿の人々をらとちて云々たぶてと雨のふるやうハ車ハかたかへて

たぶさ手拳。俗コ手ブ(万)廿一「く一ろつくとぶ一の崎(うつ)俊蔭上ノ十六かの國

までもてりへるべきことハおのがとぶさの血をさ一あや一て琴ハ名をかきつく

(曾丹)四月「みくさおひ一あさかのいハも夏くれバたぶさをひちて結びつるハも

(後撰)春(遍昭)十(大和物)六一をりつハたぶさハなるたてあがらハよの佛ハ

とあたてまつる契冲古今序ノ注樹下集喜撰「ハがれハるたぶさハふれト極樂の

西の風ふく秋の初花(堀太)擣衣匡房「ハころもうつハちの音ハをたむハかれとぶさハに一

ものおくハやあるらん(夫)五慈鎮カ哥詩句ハいとづらハ文人の心ハをさハまり拍子

いむハく伶人のとぶさハのありて云々補(月詣)三前大僧「さかづきをとるとい

見せてとぶさハいながるハ花をせハとむハむる(神樂哥)「とづがきの神のハよハ

りさハのをたぶさハとりてあそびハらハも

とふさハ和名ハ十二禪唐韻云松毛乃之太乃一云水子(神代紀)下ノ著犢鼻(雄略)三

乃喚集采女使脱衣裙而著犢鼻露所相撲○章昭云今三尺布作之形如牛鼻者也(宇治

拾)三、あかきものときとぶさハいハろハき(万)十六無心所著哥「ハがせハこがとぶさハ

にハるつふれ石の吉野の山ハ氷魚ハさハがれる(同)同二ふもハトモト(長門平家)四

木の皮をそぎてたぶさハさハかハき(著聞)十三水鍊のハとめハたハりハけりハかハやうハの用

意ハやりねてたぶさハさハをハかんハりハれたハりハける(長門平家)十八能登守云々唐卷ハめ

の小をハたぶさハりハきてハからあやハおハさハのハよろハひハをハきてハあハぎハさハとハびハおりて補

(宇治拾) ^{十二}ままたのよてたぶさ死をかりをして(著聞) ^十それもとちてたぶさ死
りきてねり出さり(宇治拾)賀茂祭の日ま裸よてたぶさ死をかりをして(同) ^{十一}
の聖たぶささにて西よむりひて河よざぶりと入るとよ

【とぶせ】 田廬(万) ^{八、四、十三}「とぶせからむいほしをを田をかりみたり田ぶせよをれば都
おも不ゆ

【とこ(和名)】 ^{十一、十五}脊瘡陶隱居曰壚有九種柔鹽療馬脊瘡 ^{俗云}

【とこ】 田子(榮御裳着) ^十雨をよふりてとこのたもとども、志をとけたり(顯季集)

「とちとちと山田のさかへひきつれていそぎてとゆる田子のけりきり(夫) ^{十二}後

千番 ^百「いねがてよいはもる田子のり枕よよおくてのつゆぞひまをき ^補(續千)

戀一 ^{公雄}「限あれば五月の田子此袖よもおりた、ぬよりかくいへららト(堀太) ^{早苗}

「さかへとるたこのも裾よあらなくよ濡きぬをのみかとかきるらん(夫) ^七早苗仲

「いそけ田子のぬあひのせせのふいたちよまはるひ衣よいぶつくとも(榮月) ^{の宴}

五月のさまたれよも哀よてしとけくらいたまのさもとよおとらぬありさまよて

【たぶのかけかこ(夫)】 ^七知家「時よあればたぶのかけかこがき日も猶いとなくやさ

かへとるらん

【たぶ】 手輿(和名) ^{十一}唐令云腰輿 ^{和名}太古之

【たえ】 絶。 ^{たゆたゆるハ別ニ次ニ出ス} ^{たやすモ別ニ前ニ出ス} ^{〇万ニワタリテ} (源 稚か

本) ^九心にかけていかん、といたえおおもひ聞え給へれど(同) ^{と、と、と} ^三とえ

ぬせくせのあさからであひそひて(同) ^八まおとよろいかとも思ひてとえぬべだけ

しきからバ(詞花) ^上 ^雑たえよける男の五月をかりよおもひのけむまうで来りけむバ

よめるよみ人(源 花の宴) ^七さてたえかんといおもむぬはしきかりつるを(清正) ^廿

ひとしきぬねやいたえさるると、ぎに(万) ^{十四、十一}「ひたちあるあさかの海の玉もあ

そひらバとえそれあとととえかん ^{案スルコトエセシタエセヌ} (後拾) ^賀「ちよを

いのる心のうちのをさしきいよえせぬ家の風よぞありける(續後拾) ^{戀四}「と

しからぬ命をさとりあふおとのたえバともよと契らざりらん(万) ^{十五}「これどあ

かぬよしの、かそのどこかめのたゆるおとなくまよかへりみん(新葉) ^{神祇}「神代

よりかがき久しくつゝへきてたえトとぞおもふいそ川浪(古) ^{戀二}「風ふけば花

よとかる、ちら雲のたえてつれなき君が心り(源 稚かもと) ^一いと人目のたえと

つるも(同 旗柱) ^七此参り給へんとありし事もたえされてさまたけ聞えつるぞ

【とえま】 絶間(源 夕かほ) ^十大殿よとえまおきつゝ(同 葵) ^五 ^卅たえま遠むきど(後)

戀「よそおがらやまんともせせあふことい今おそ雲のさえまあるらめ(同)同「今
のみとこのむなれども白雲のさえまいつかあらんとせらん(拾)戀一よみ「たま
をざれ糸のたえまよ人をとてせれる心のおもひりけて死(同)同四よみ「いかさか
りくるしき物ぞかづらきのくめぢのそし乃中のさえま(源 薄雲)十御文おごもさ
えまかくつかさけ

とえと(源 桐壺)卅おそいどのよ二三日おごさえとよまうで給へど(夫)春一
後京極

「年くれし雲るのゆけせれをめてたえと青きしのめ此空(源はさき)廿五

えたえわれぬものに思う給へし(同 浮舟)六十かへりてとさへさえとよまある

も(詞花)戀。男のたえくはありける比のかにさいひ「思ひやきりけひの水のた

えとえよかりゆくほどの心せをさを(源 若紫)卅いと近けきバ心せをさある御聲た

えたえ聞えて(新古)春上式子「山ふりみ春ともしらぬ松の戸よたえとくりる雪

の玉水(詞花)戀下「そよよのあさしをのわされ水たえとからであふよ

もがあ(式子内親王集)「草まくらむりかくやどる露のうへせとたえとみかく宵の

稲妻

とえ絶。死スルコ(新古)戀一式子「玉のとよさえかばたえねあがらへば志のぶる

おどのよとりもぞをる(金葉)下人の許し侍りれるよにまかにたえ入てうせおんと

しけきバ(源 あふひ)十内よ御せうをお聞え給ふやどもおくたえ入給ひぬ(いせ物)

四十云々 じよとてたえ入にり親あてまはり(源 夕顔)廿い死のとくたえとてま

けり(同 桐つは)八夜中打過るやどよかんたえとて給ひぬるとてなきささバ

とえたる 是モ絶倫。サツパリト(源 わかな)上八かのさえさる岑ようつろひさまひ

たえて 契云絶倫ノ心一向ニサツパリ一圓ト(古)春(いせ物)八上世の中よたえてさ

くらのおかりせば春のおろのさけからま(古)戀(六帖)(貫之)「風ふれバ岑

まよかる、横雲のたえてつれを死君が(六)貫のあろろ(大和物)四「と死ものく

ゆる心ありしかどひとりたえてねられざりなり(うつは 初秋)下九「たのめ

ども淺かりききバあふ坂のしづもたえて結されぬ哉(同)下ノやんごとさき朝臣

としてうついつたへたる人おや答たえておしと申(同)同 仲忠よさえて其を

ぢおぞえむ侍るをましてもどの師のおぞゆることりさくや侍らん(うつろ 櫻の上)

上ノ上るくれ給ひてのち夢よど見え給へと心せそうわびかりまに思いか

冊三 せさえてかん見え給のざりしよ云々(蜻蛉日記)中上これまして心やま死さま

三十一

よてたえてことづてもかゝさながら六月にかりぬ(竹どり)十勅若此めのわらその

たえて宮づのへつかうまつるべくもあらせ侍るをもて煩ひ侍る(源と、さ)十

くおそましくいいととき契りふかくともたえて又見ト(同)廿さりとともたえておも

ひをかつやうのあらトと思給へて(同)うきふね廿その御いらへいたえてせせ

とて経緯(万)八ノ一「経もかく緯もさためせとめらがおきるもそちま霜をふりを

ね(堀太)紅葉匡房「からまゝき霜をさたてととのめども時雨の糸れをほよせ哉(後)

秋上「秋のよれかきわかれをたかきたいたてぬきまこそ思ふべらなき(和泉式

部集)上「さゝがはのながくいとをや秋野よまたおるむいのでぬきまをる(万)

七、「三吉野れ青ねがとねの苔むしうたきかおりけんたてぬきなま(和名)十四緯

和名織横絲也謂緯則經可知

とで藝(夫)廿八ホタテ水タテアヲタテイヌタデ

とてい立石(源あかし)十木立たて石前裁かどのありさまえもいそぬ入江の水を

と(夫)廿二家「ぬかとはふ池よなづめるとて石のたてたる事もかきとぎの哉(同)

二(同)卅山家「わきとせぬもとの谷川やり水よ石とてわたはおく山の庵

たて楯(和名)十三楯和名(万)廿八「まはらせの柄のおとはかりものゝふれ大まへ

つぎと楯たつらゝも(いはぬ)かみのさゝかひゝる所とてたてをついたるやう

あるいそほさもあり補(宇治拾)十五叶のぬまでも楯つきをかどいたまへ(著聞)

十、二たてつかせて船のへまをみいで、云々幕引まをゝとてをつきて

たて(神代紀)上ノ所植此云多底婁(うつ)吹上下ノおほみちて花の木海また

てること見ゆ(古)詞云々をこにたてりける梅の花をりてよめる「女郎花う」と

みつゝぞ行をぐる男山よゝとてりと思へ(同)同兼「をまへゝうゝろめどくも

見ゆるかああれたる宿よひとりたてれば(後)春(大和)六(遍昭)十「せりつれば

おさまけがるたてあがらまよれ佛よ花奉る(うつ)吹上下あせせたき物を山のか

とよつくりてこがねのえごに白かねのさくらさかせてたてあらべ

とてたる次たて所へ

とでかが一(夫)廿七知家新六二「と山川のゆる小結のとでながゝあらくもよせる世

ようまれはん補信友説蓼を搗テ汁ナトリテ流スナリ金葉とでかる舟のそぐるあり

は母相摸コレモ其料ナランカ

たてかめて(夫)廿二家集「里人のおほぬさこぬさとてあべてむまのさむをぶのへま

りぬる

とてく〜 (沙石) 六下腹あ〜く〜とてく〜かりけるが

とてら (狹) 一ノ上四十二法師 法師たてら〜くあがちあるとさを給へば佛のよ

くと給ひてのゝるめを見せさせ給ふかりの〜

補 たてくび (宇治拾) 一童のたてくびをとりて引とめていふやう

たてまつる 奉。常ノ敬(源 桐つは) 八例の作法をさめ奉る也(土佐日記)まさつら

酒よき物とてまつれり(源 桐つは) 八御涙のひまかく流きおとせまををあや〜と見

奉り給へるを(同 椎か本) 七うへわらへのをかき〜て奉り給ふ(同 總角) 七十五六

日人も奉り給おぬよ(同 ゆふか同) 四惟光の朝臣のいできたるを奉らば(いせ物)

八十人のもとへ折て奉らばとて(古事記) 上ノ登與美岐多底麻都良世(源 桐つは) 十

段 一の宮を見奉らせ給ふよも(同 は、き、) 九 四十うへよむわき奉らん(いせ物) 七十人

々さ、夕物奉りたり集たる物千さ、とさりあり(拾遺) 下 難いせのよを所うみ奉

りたるよのなくかりにけるが云々(同) 同天曆の御時一條攝政藏人頭よて侍りけ

るよ帯をかけて御碁あそびなるまけ奉りて云々(枕) 十八 ありきたてまつり

て(源わか紫) 四十一御父か〜おにわた〜奉りてん(後撰) 春下 一をりつればたぶさ

よとがるたてあがらよのよとよ花奉る

附たいまつる (土佐日記) ぬさたいまつる

附たてまたは (高光) 三 たぶきよの衛門督五せちたてまた〜給ふよた死ものかうを

いうあはととてそらたきものすあ〜とたふの岑よこひ給へるよ橘のかりたる枝よ

實をとりのうて、それよいれてたてまたをとて(うつろ 藤原の君) 四十九 抑此みそ

トのいかよぞ御使あ〜たよたうびつるのをまやりものたてまたせんを云ていぬ

たてまつる 是モ常ノ敬語ニ異ナルコトナシ但見何トイフ折(源 玉かつら) 廿 其人此頃

かん見奉り出たる(同 松風) 九うれ〜き事ども見奉りそめても(同 蓬生) 十おぞろ

夕の人の見奉りゆるはべきよもあらせか〜(同) 十見奉りおかんがいと心くる〜死

をとて(同 玉かつら) 廿見奉りからぶるよ(同) 卅見奉りつけたり〜

たてまつる 是ハ衣ヲ着セマ井ラセ又ハ興馬車舟ナドニシマホラセ(枕) 六 奉りた

る御そよ云々のた文の若やかなる御を奉りて(同) 三 もえきのわかやかある御を奉

りて(同) 五 くれあゐの御そのいふもよのつねあるうちき又むりたるもあまた奉

りて(いせ物) 十六 一これやこの天の羽ころもうべ〜こそきとがみれ〜と奉りはき

(源さりのほ) 五 御袴着の事一の宮の奉り〜おとらせ(同 鈴虫) 十 志たがさねをり

り奉り加へて(同 わかぢ) 下ノ御をさぞ奉り直せ(同 桐つは) 廿 御を奉りあへて(枕)

三ノ四藥 御帳奉るもやの柱の左右よつけたり(源あかし)卅御なほ一奉りひきつく

ろひて(宇治拾)十三ノ大姫でせんの紅の奉りたるとりたりけき(同)十三落給ふを

かいちかふりを奉らで(枕)九ノ廿齋院ノ御こゝたをいあさもてあへる是に奉りて

云々(源あかし)一夜のあけてぬさけし御舟に奉れとて例の志たしきかぎり四五

人むかりして奉りぬ(同)此瀆のたちし心やそくおのゝまは舟より御車に奉りう

つるやと(同)わか紫)廿御車に奉るやと云々御むかへの人々きんたちあどあまた參

りさまへり(同)うきふね)十やうさうどのやとまでの御車までそれよりぞ御馬の

奉りける案ルニ召させ奉ルノ召させテ畧シ御帳ハオロシ(枕)十三神ハ八むた云々

とゆきかどよあぎの花の御あし奉るかといとめでた(大和物)百六十御車の

ちりよりたてまつれる御ひとへの御ををかつたさせたまへりなり

たてまつれ(奉マツラセテ)源若紫)廿又の日御文奉れたまへり(同)紅梅)十奉れたり

一あり(同)源標)三十御使奉れ給へり(補)廣足接たてまつれたてまつらせの約にて

りといひきたりこれ奉りといことある所なり奉り四段(源わあ紫)四十君の御

活けとも奉れいさらに活かず給へり給ふなどついくのみ也(源わあ紫)四十君の御

もとよりのおれをまつれ給へり(同)四十とのる人さてまつき給へり

さておと(源をどめ)初紫の紙さておとをくよの藤の花につけ給へり(同)うき舟

五又をぐくしきたておみどりへて云々此たておとを見給へば女の手よて

て(同)繪合)七冷泉ノ御書たて、好ませ給へばや二かくか、せ給ふ(同)七いと

よ一ありておのぼる中に畫をかんたて、好ませ給へば(同)をどめ)五學もんをたて

てあまひけきばるんふさぎのまけさまひしかおおやねとよかしくかん

(同す、むし)七くどくの事をさて、おぞいとを(同)野分)十親あどの御けうを

もいりめしき方さまをばさて、人にも見おどろかさんの心あり(同)あけまき)四十

もかどくもあらぬ心ひとつをたて、ううてのみやの見奉らんと思ひあるやう

もありかど(同行幸)十さてる所昔よりいとどがさき人の本姓よて(同)帯木)

六中の品にかん人の心々おのが、のさてるおもむきもみえて(枕)三ノ十六清

ヲ、いとく見えてをかき筋かどさてたる事もなくたゞありなるやうあるを

皆人さのみ知るる(源蓬生)十さもあびた給へかんたけき事もあるまど御身を

いかよおぞしてりくさてる御心をらんともどれつおやく(同)かしの木)四十あや

しう情をたてる人よぞ物したまひをば(散木)下、色好まさてる人の男をぞへ

けるよいかあるかと尋られてたひむれてよめる

たて、

此たて、ハイヒタツルナド(源東や)四十せめてそ、のかうたて、

補 たてあふ

(著聞)十二、汝わきよたてあもん心とさき事をいひそ(同)卅いかに

もさてあひぬべき心ちもせせ候いかば

たてーとと

立部(源野わき)九ひそたかそら所々のさてトとみそいがいやうのもの

(同) 柳

一月のそあしくまあるたてトとこのもせよたてりけるを(枕)十二、さてトと

みあいさるかたのかさよそひさちて(宇治拾)五、つり柱立トとみかどをさへやぶ

りさきけり

たぎ

タク繩ハ拷繩(中務)廿。人の家より瀧ながれたり「いかでか、い過てゆくらん

川波のたぎとまらるゝ宿の花より(契沖河社)ニ云大凡カヤウニカケル詞書ハ皆屏

風障子ノ繪ニ合セテヨメルナリいかでか、い過て行らんトハ馬ヲトメタル男ノ瀧ヲ

イヘル也川波のたぎとまらるゝトハ馬ノダツナナクリテトムルヲたぐトイフ万葉

第十九ニモ「いそせの馬たぎぬれてトヨメリ古今ニ「あまのあいたぎトヨメル

モたぐる也ソレヲ瀧ニソヘテ道ユク我サヘカク宿ノ花ノ見スグシガタクテ馬ノ引

トメラル、ニトヨメル也たぎとまらるゝ、いたぎとめらるゝヲ寫シタガヘタルニモ

アルベシ以(古)雜下「思ひきやひかのわりれよおとろへてあまはあそたぎいさり

せんとい

たぎ

彈碁(後漢書)梁冀傳 梁冀能挽滿彈碁注 挽滿猶引強也(藝齋)曰彈碁兩人對局白

黑碁各六枚列碁相當更先彈也其局以石爲之又(老學庵筆記)見エタルモ大抵ユレ

ニ似タリ但局狀如香爐蓋トアリ又案ズルニ(西京雜記)云成帝好蹴鞠群臣以爲勞帝

曰可擇似而不勞者奏之家君作彈碁以獻(禁秘抄)上、殿上ノ條圍碁彈碁盤在大盤所

(源すま)四十九たぎのぐ(同 椎か本)ニ碁はぐ六たぎのさんともかどとり出て心々

をさびくらし給ひつ

たき

瀧(新拾)冬 貫之「山たぐと梢をさしてあがれくるたぐとたぐへて落るもそちバ

(玉葉)雜二 遍昭「水とのみ思ひしものを流れくる瀧のおろくの糸よぞありける

たき

瀧殿(源松風)六 御たうの大かく寺の南にあたりて瀧の、心をへかどお

とらせ面白き寺あり(後拾)雜 大覺寺のたきとのをそてよと侍りける赤染衛門

補 たぎち

(万)九ノ「落たぎちあがるゝ水のいそよふりよどめるよとに月の影見ゆ

たぎる(万)九ノ「川のせれたぎるをみれば玉もりもちりみだれてあるこの川とかも

(朝忠集)卅 六「おとまやま水のたぎりてあがるともさそとらせのまさりしもせト

(散木)下六「たゝとおける岩ををぐるかまた川おびたゞしくもたぎるかるりか

(うつろ 藏開) 下ノ「わきいづる涙の川のたぎりつゝ戀ぬべくもおもひつるかを

(瀧松物) たぎりてあぐれ出たる水のそとりに(後拾) 雜六「おく山はたぎりておつ

る瀧つせの玉ちるさかり物を思ひそ(散木) 中四「よもそがらたぎりて落るかまた

かなこや待かねの山川の水(六帖) 三「うちたえておつる涙あるたげのたぎりて

ひとをみぬがわひしき(大鏡) 八ノ御堂の南面よりかへせたてゝ湯をたぎらりつ

つ(宇治拾) 三たぎりぬとおもてよかくるやうにおおやえて○湯ニタギル 〇部ツテ

たぎつ(万) 卅二落沸(新拾) 戀一「いそしづいそぬものからこがくれてたぎつ心

ぞ人のいらかん(古) 戀一よみ「足引のやまゝた水の木がくれてたぎつ心せせれぞ

りねつる(同) 雜上「おちたぎつ瀧のみかかみと一つも老よけらゝな黒死をぢか

親王集) 下よのせめて思へとかたしきの袖こはたぎついろまさるかり 〇(万) 十

「今ゆれてさくものよもがあまの川春雨ふりて瀧つせの音と(寛平歌合) 「あかき

してわかれし宵のかきた川よとともなくもたぎつあゝろり(万) 七泊瀧川をらゆふ

花は落たぎつ(同) 九ノ「山高み白ゆふとあゝ落たぎつあつとの川と見れどあかぬ

かも(新古) 戀二、二條「かみど川たぎつ心のそやき瀧を忘がらゝかけてせく袖ぞあ

き(万代)(新續古) 雜上、勝命法師「一一ぐれをぎよけらゝかよ一のよし野の瀧ついと

たゝくなり(万代) 戀一「高圓の山はたぎつを岩でめし聲をきゝてもぬるゝ袖りあ

たきつせ 沸ッ瀧ニヤ前ニ出ス後拾ノ哥ヲ見レバたぎりておつる瀧つせ(古) 冬「ふる

雪のかつぞけぬらゝ足引の山は瀧つせ音まさるかり(同) 戀一よみ「瀧つ瀧の中よも

淀ありてふをかどこがあひのふちせともなき(拾員) 七「まづもあはれこさかをお

つる夕立のたぎつせうくるもとの谷川

たきのいそつせ 瀧の(夫) 廿七、衣笠(新六) 二「あゆそしる瀧のいそつせわたりへり

けるもそゞりき水のいろかあ

たきのいと 瀧の系(風雅) 雜上「松の音をことよらぶる秋風はたきのいとをやを

けてひくらん(拾遺) 冬「あがれくるももちた見をばからにしき瀧のいともておれ

るかりけり(新葉) 夏「打そへてさらそ目もかゝ布引のたきのいらいと五月雨の

頃(續後拾) 冬 惠慶「水上に氷むそへを岩そゝぐ瀧のそら糸とぞれざりなり

たきのみを(新拾) 春上「春立てかせやふきとくはふこれバ瀧のこをよりそあぞち

たきのせさき(夫)廿四「たつた川瀧のせさきにそらへつゝいのりくらに君がた
めとぞ

たさくち 瀧口(源 夕かほ)廿七此う申もの瀧口なりけきべゆづるいとつきく
くうちからして注 藏人の被官也院にて武者所といふかり御湯殿の瀧の下勤番
そる故に此名ありとぞ

たさまくら (頼政集)下「せきもあへせをかれて落る涙か我をばとつる瀧まくら
より(堀初) 山家「山里のねさめの床れさびしきよたえを音をふたさまくら哉(夫)

廿六「いかよせんたきのいせの瀧まくらみをのやがらくどり行世を(山家)
為家 上「さよざれの山田れあせの瀧まくらかきをさねておつるかりけり(濱臣)云師
頼の歌によめる瀧枕の波枕といふたぐひかり頼政の心いさゝかたぐへり

たさあり (紫日記)たさありの光の心もとをければ四位少將をとをよびよせて
志そくせさゝせて人々の見る前に出たるさち
わかしと同じ

たさ (後撰)賀村上「山人のこれる薪の君がさめおそくの年とつまんとぞおもふ
(夫)廿六(新六)五「いかよせんあひとおもひと身よをへてあん世の薪けつた
もか

たさつく (法華經序品)佛此夜滅度如薪盡火滅(玉葉)釋教法性「人忘れぬのりに
あふ日をたのむあさささつきよ跡よのこりて(源 若菜)上八あさささつきよつれけ

る世のまどひいぶかかりけるを(後拾)釋教前律「常よりもはふのかさそを哀な
るたれづつれよけふりと思へ(同)哀傷 小侍從「いよへの薪もはふの君が代もつ

さまでぬるぞみるぞりあさ(千載)釋教 膳西上人「たれづつきけふりもそとて去よけ
んこれやをどりと見るぞりあさ(月詣)釋教寂「とれをあるつるの林ををるあ
くもささつきつれぬとおもひけるか

たさあり (榮 初花)廿例の卅講おまかせ給五月五日よを五卷の日よあさりけれ
ば云々きたたかた六位衛府をど薪こり水かともるをかり殿をら僧ぞくあゆ
つゞきさるのさまよせかいうめでさうたふとくかんええたる(月清)十一「岩がね

のこりく嶺をふえからささささささささささささささささささささささささささ
たさめ 灶(源 うすくも)十えからぬ御ぞひきりさねてたれしめさうぞたたまひて

(同 やとり木)四十よのつねの香れりまいれたさしめたるよも似せたるささささ
あると

たきもの(六帖)三(夫)卅二よみ「たきものこの下はふりふそおともわれひとり

どバあらはべーやハ(蜻蛉日記)上二 九きもの、このめをかりのかわきかん(夫) 十三條入 「さき物を雲の衣よみよせてたかをたつめのくれを待らん(源繪合)二 道左大臣 くさくさのたきものどもくぬえ香又さきさまは百歩の外をおほくすぎ匂ふまで心 あとよせさせ給へり

【とゆ】(堀太) 残雪「道たぬといとひい物を山里よきぬるのをしきこそ雪哉(万) 三ノ ちら雲も三舟の山よたゆる日あらめや(源玉萬) 四 をかたよゆる時かく(拾遺) 十四 貫之 「まつりせのふらん限のうちをへてたゆべくもあらせさぬ藤かき

【とゆ】(万) ヲタノクヲトモヨミテユタノナリヒハ詞(万) 二ノ 大船猶預不定見者 案ズルコ此(万)ノ文字ヲ見テ解スベシ○猶(万)七(六帖)三 大海ノ島もあらなく 預シテ思案ノ決セザルコトニツカヘリ

海原のさゆたふ波よたてる白雲(同) 卅六(同) 三 大船のさゆたふ海よいかりおろしいかましてりもわが戀やまん(同) 卅二 あま雲のさゆとひやまき心あらを(同) 十五 あまぐものたゆたひくれバ(六帖)下 「ことよのまんといひひてくらまの 嶺の白雲たぬたひより(万) 十六 「大船のまつる泊のたぬたひは物思ひやせぬ人の子ゆゑよ(同) 卅一 「白妙のまがころも手まつゆいおきぬいもよあまをたゆたひにして(六帖)下 「さる山よたかびく雲のたぬたひは思ふ心を今ぞ定むる(同) 二

「ことまわりよらせる妹よ山川のたてのみどれてたぬたへる君(源すま) 卅 「琴のねよひきとめらるゝつをで繩たゆたふ心君ゝるらめや(同) 上ノ 十六 「心よこくおもひ給へてたゆたふことのと侍りつゝ云々(同) 玉かつら 六 さらけきやとあとをるいきほひかき人のたゆたひつゝをがくゝくも出たぬとよ云々(同) 卅 六 卅 「心ありてひく手此綱のたゆたもぐうちをぎまゝやまま此浦をみ(同) 也ふか 卅 四 あり侍りかんことをくちをしく思ひたぬとひいかぞ(同) はしひめ 三 出家 ほんも とままろしうを給ひけれと見ゆづる人もかくてのこいとぐめんをいゝとくおほいたゆとひつゝ(同) 東や 卅 三 いざやとおぼしたゆたひたるを(紫日記) 廿 ともき心とも たゆとひて(和泉式部集) 上 「とも火のかせよとゆとふ見るまゝあかぢぢりかんとかをこそこれ コレハ灯の前ニ花 卅 (万) 十七 「家よてもとゆたふいのちかみのうへは思ひしればおくかいらせも(同) 卅 二 一つねやまを通ひし君がつかひあむ今のあそととさゆたひぬら(万代) 兼輔 「あひさきの山へをまればちら雲の立るとゆとひ物をおそおもへ(續後拾) 戀一 光孝天皇 「あさの山朝る雲の風をいたみさゆたふ心これのもたらド

【とゆ】(万) 十四 「つくさねのいともとろよおつる水よよもたゆら

よわがおもそかくに〇宣長云よゆらハ上ヨリノツ、キハ多キ意、哥ノ意ハ男ノ心ヲ
アヤブミテタシカニハタノミガタク思ナリトイヘリ上ニモよも多欲良爾トヨミ
テ其所ニモイヒツ

よゆむ 油斷 オソナハル (續紀) 卅一、無怠緩(文選) 怠(源 手習) 十六、小野尼ノさこやか見
看病スル所ニ

え給へさうれう思ひ聞ゆるをとかくくたゆむ折かくをひるてあつひ聞え給

ふ(枕) 廿八、霧のたえま見えぬとよといそぎつる文もたゆめぬるこそうろめさ

けき(源 あかし) 七、くやう法よゆめていそぎまるれり(同 夕かほ) 七、たゆませあさり

ありけバ(枕) 四、ひるかともたゆませ心づりひせらる(同) 七、女房のさうぞく裳り

ら衣などの折にあひよゆませをううてもさふらふか(同) 二、よゆませるもの、さ

うトの日の行ひ(同) 十二、いとよふねき御物のな侍るめるをたゆませ給ひざらん

かんよくとべるべき(源 もみちの賀) 廿、おまぬやといそんとおもひてよゆめさこゆ

(同 夕かほ) 七、くうらかくよゆめてそひかくれか(同 末つひ) 十、あさうとてたゆ

め給へるといとはしけきを忘らぬがよて我かさへいよけり(同 夕きり) 七、御物の

なよゆめれるにや(枕) 十八、これがたふの必せんせらんと常よ心づかひせらる、

もをかきさいいとつれかくかよともおもひさらぬやうにてよゆめませすもをか

(同 寄生) 四十、さてもあさまうよゆめくく入きたりし布ぞよ(落窪) 十一、よよひ

雨ふればよもおせせと打たゆめてふたり(源 うすくも) 七月ころの常の御を

よとのと打たゆめさつるを(枕) 廿一、そのよびりへりてまひりうれいかぞい物

かなさしもやあらざらんと打たゆめつる舞人前よ召すを聞つけさるま、ち云々

(新後拾) 戀一、うら風のむかふをせよゆ舟のよゆむときかく身のがれつ、

(續千) 釋教 定家 「よゆめを岩間よ時のちかへどもたゆませのする宇治の川ふね

よゆめかく(源 檣柱) 二、玉カ思をせよゆきせくせありとおもひ入給へるとまれよ

みあきをヒゲいミトウつらうとおもへバ

よゆく 支体 ヨイヘルハダルク也心ヨイ (源 きりつち) 七、まよなどいよたゆけにて

(同) 右 いとくるよゆけよたゆめかれば(同 あふひ) 廿、御まをいとよゆに見あけて

(古) 戀 (六帖) 五、「おもふともあふともあそん物かれやゆふ手もたゆくとくる下組

(拾遺) 秋「てもよゆくうゑいもゑるくをみかへいいろゆゑきとがやどりぬるうか

(仲文) 卅三、か「手もたゆくとくひかものこらねバ猶ねぬなそのくるやくる

や(伊勢集) 卅(六帖) 六、「よが袖ようつらばうつれ手もよゆく(やまつみやいそま

撫子の花(宇治拾) 十二、かひかたゆくもあらせ(重之) 三「天の原わさるちどりの羽

たゆまきしをかとも見てかへる哉怠慢ノタユミニアラズタユサコ (方丈記)を

べん事あればおのづから身をつかふたゆからせしもあらねばと人をまがへ人を
かへりくるよりのやそく(源わか菜) 下ノあやしくたゆくおろかある本性にて(紫

日記) 廿六たゆまき心ともたゆたひて(源かけるふ) 十カチ心なく放ちおきさるま心

安くて人もいひをか給ふなりせんかと思ふにもわがとゆく世づかぬ心のとく
やしく(空穂 菊の宴) 下「君よよりのとゆま袖もひぢぬをさうれいかりしもえこそ

つゝまね(曾丹) 百首「さぎもあがれさのあさかよひかされてせあさへあまりかひ
たゆれりか(古) 戀三「さるめなれわが身をうらとらねをやかれあであまはあ

たゆくゝる(狭) 二上かひをかたゆまもあらせまをぬまをそと心ぐるまう(赤染集)
「夢にぞよみぬよの敷やつもるらん鳴のそねがきてあそたゆけき(万) 十二京師邊

君者去之乎孰解可言紐緒乃結手懈毛宣長 拾 八「あめてこそちとせの春のさ
つゝ見め松を手とゆくまよか引べき(万代) 好忠「ふちふ野ま柴かる民の手をたゆ

とつかねもやらせ風のさむさよ(同) 夏 顯仲「手もたゆくわがあめゆひをかぞしこの
花よいつゆもよれておかなん(金葉) 夏 孝善「あやめぐさひくてもたゆく長き根のい

のであさめの沼よおひけん(曾丹) 順「をい鳥の羽ぶさやたゆれさゆるよの池のま

ぎのよかく聲のする(相摸集)「手もとゆくからは扇のおきどころわをるさりりま

秋風ぞふく(山家) 上「氷さるいかさのさとのたゆけきばもちやこさましつづのや
ま越(玉葉) 夏 具顯「ときぬとおりとつ田子の手もたゆくとるや早苗を今いそぐなり

(兼盛集)「足引の山田のこまけあはままでといおおせさりのおふもてさゆい
とめ 爲 戀一 百世「まひいかん後のなませんいなる日のためあそ人のままくるい

ま(万) 五「龍の馬も今もえていか青まよ一奈良の都まゆきてこんため(源末摘) 廿
かの翁のとめまぞりまもおぞりやりて奉り給ふ(同) 若菜 卅此折のまよらをつく

し給いんとするため(同) 帚木 九「甘きんどの御ためま(同) 八此御ためまの上が上
をえり出ても猶あくまどう見え給ふ

ため 揉 たむ ノ所ニ己 ニ出ス

とめらふ(源桐つは) 十やゝためらひておせせまどつたへ聞ゆ(蜻蛉日記) 下 上い
どうあきくしてとかうためらひて詞云々(同) すま 八おれくらみたりこゝちため

らひ侍るぞとに(うつは 田鶴の村鳥) 十宰相涙をおぞりてとさりりものもの給い
云々 源宰相からくためらひて(狭) 一 上 五 ホリ川殿狭衣天へノボリ 廿四 玉フトカナニ玉フ所 ニためらひて御前

よまありまへ(源總角) 十こゝちのかきとどりをやまうそべるまめらひて

(空穂 藏開) 中ノ聞えさせんと思給へつれとどりよ、ちのいとあやうそべりつ
 ればためらひ侍るとてなん(同 嵯峨の院) 十日頃いさる所侍りて云々今けふあま
 すこしてさめらひて参り侍らん(發心集) 十六ノくる一々あるをさめらひつゝ聞え給
 ふ(白文) 廿八晚起云々 聞健且間行(風雅) 八上、よみ 「梓弓さめらふそとよ月か月の
 いるそのみ見てりへりぬるか(散木) えまるらぬよ一申させさりければ猶さめ
 らひてまつうちませてまゐれとおせせとありと藏人のつけ、まばためらひてう
 ちまで参るを(著聞) 廿六 又いつをいつとかくてさめらひさてらんぞとおもひて
 (源わか奇) 廿三 あながちよためらひたせけつゝまゐり給(同 かし木) 四 ひさう
 えためらひ給ひせ

【さめー】 注 様体。本ノ心ハ例(後撰)冬「年くれて春あけがたよかりぬまば花のさめ
 ナリ 字ト同クヤ
 一よまがふそら雪(此詞の説 新抄可考)

【ためー】 例(新勅) 賀 公忠 「みか人のいかでとおもふ万代のさめーと君を祈るはふりか
 (落窪) 四 女の男よおもわれ給ふさめーよ此北の方を奉るべー(源 桐壺) 三 やう
 やうあめの志たよもあぢきかう人のもてあやまぐさになりて楊貴妃のさめーもひ
 き出つべうかりゆくよ(同) 廿春宮の女御のいとさがなくて桐壺の更衣のあらひよ

そかかくもてあされーためーもゆゝうとおぞ一つゝみて云々(同 帯木) 廿七 これお
 その給ひつるそかあきさめーあめれ(同 桐つは) 二 いやくあかぢあそれかるもの
 よおぞして人のそりせもえまぐらせ給ひ世世此ためーよもかりぬべき御もて
 ありかり(同 梅かえ) 十 後の世のさめーよと心せさく忍び思ひ給ふるかと聞え給
 ふ(同) 九の御をーへこそあがきたためーよありぬま(新千) 慶賀 「花のいろち
 とせをかねて古のさめーよまさる春にもあるのを(詞花) 賀よみ人 「君が代のひ
 さーかるべれさめーよや神もうあけんそみよーの松
 【たえ】 民(源 玉葛) 十 ちをーき民よ侍らせ(竟宴哥) 國經 「おほささきさかつの宮
 の雨もるをふのせぬおととたよのよろあぶ(新古) 賀 民のかまどの賑ひよなり(夫)
 卅五 後一條 入道 關白 「いつまでと夜寒の衣ぬぎかねてあそれとさみをおもひーをけん(同)
 「むくふべき世のことどりの思へども民のちりらをさせけやれをる(同) 爲家 「い
 かよいて民の心をうるそさん小田の早苗よ雨をまかせて(同) 家隆 「世中の草とる
 民ぞこゑよー聞もあらぬあぢの、空(同) 廿七 「行鶴の鳥羽田のさかへ里つ
 づき千代のかぎとるとよの民か(新六) 五 行家 「秋さればよぎそふ民のさとかれど
 音のさびーく打衣かか

ととのと(新勅)賀前「初春のよかの都は松をうゑて民の戸とめるちよぞいらるゝ

(同)卅一藤原基政「昔よも立よをまされ民の戸の烟よきそふ鎌くらの里のちよもりち

たみのりまど(拾員)上「國とめるたよのかまどのけふりにも外山の木々のもとぞ

いらるゝ

たみのつりさ(夫)卅五「思ふべき民のつかさの名をかりにちけく力のやをむ日も

か

とみのくさむ(續千)賀基良「風わたる民の草葉もとよあれば君よぞなびく千代の

秋まで

たみのやつあ(夫)廿二「ふちふ野よたよのやつこのよえむかるあそよもこひのよ

をぞやそめぬ

たみのけふり(夫)十九「千代までも民のけふりやたえざらん鳥羽田のおも

の朝けゆふけよ

とみのこへろ(續千)秋下御製「いそぐある秋のきぬよの音よこそ夜さむの民の

こへろをもうれ

とみ言ノナマ本語とむナルベケレドたむトイヒシ例未見及バス(白文)十四金氏村

中一病夫生涯濶落性靈迂(拾遺)七物名またいみ「あづまにてやいなもれたる人の

子のちたゞとてこそ物はいひけは(夫)二(山家)下「鶯の田舎のたよの巢かれども

たよとる音をさかかぬかりけを(源常夏)廿詞とて(同橋姫)七けむひいやくこ

とはとみて(同玉かつら)十をかくのきたりとおもひたる詞ぞいとたよとりける

おもひえとる心をかりせいひあらは

たよづ(夫)廿六「苗代の田水にりたをやそいつゝ家路よりへる雁をよそ思ふ

たよたるハ彩色スルナ云金ダ銀(正治百首)範光「いろをふるゑ下まが浦の月を

またうけたよわたる夕かよとわか(著聞)十五源氏繪十卷とたるれう紙よりきて

とみ廻(万)十六「沖つ鳥かもとふ舟のやらの崎たみて漕くときかれぬかも

とみ欲(月詣)六あり所をわする戀と「きよたよ宿をよどりてかくなよと

すれ水とやかがれゆくらん

たよろく(空穂俊蔭)上「文のよちのよこよとよろくとも其筋のおそり此ことハ此

國に俊蔭一人こそありなれ(源はきよ)十さやうからんよとろぎよとへぬべきと

ざかり(瀆松物)三「つくへとあされおのせよいとよよろづとろぎよと給ひ

一家をどのあとかよもかくかり(散木)中四十一「風ふけばたどろく宿の板」ともや
 おれよけりお忍ぶ心(夫)十九千五百「それぬるかたどろく雲のたえまより星見
 えをむるむらさめの空(著聞)十六ノ「たどろくかわたしももてふふとるのこの
 上にて文見る人に(堀太)散木下二「朝夕につさふいたの橋をれば桁さへ絶てこ
 いひかけし連哥也」
 下ろぎよけり(月詣)七公景「風吹バかゝるまがきもたどろぎていとゞあどかる朝
 がすの花(著聞)十五ノ引ぬかんとどうさけりけれともたどろがざりたまは〇濱臣云と
 ちろくの假字とるの誤か新撰字鏡暄万志呂久とあるをおもふべしとのことら
 のたやにくかといふとは同く上よそへ助辭まであろくの動の字ありとどろく
 の身動まどろくの目動也

たしぬく(著聞)十六ノたれよぬりつけんとてかくすとに人どどしぬかんととるぞ

さしか(竹取)十四ノつかうまつるひとの中よ心たしかあるをえらびて云々

うつろ(國讓)十七ノ四家の券をへて奉りたる目ろくをへて奉り給ふおれいたしりから
 ん物に入て置給へれこれをさへもかなくお給ふ(古)序詞りをかよしてと
 めととりさしかからせ(源夕顔)五十一ノさしかからねとけさひをささかりにやとさ
 めたしかバ(空穂 國讓)上五八月をかりよとの承それとたしかよのまたう給さら

せ(同 嵯峨の院)廿人づてからで御手よたしかよ奉れ(源夕か)十四ノたしりにその車

をぞ見まし(同 あふひ)廿一ノそれとまをしらねさしかの給へ(枕)四ノ廿八ノ雪山山いと

やを死事さしかよまもり侍らん(宇治拾)六ノさしかよ妻のさめよ佛經をくやうして
 とふらふべきありとて(万)十二ノ「たしかあるつかひをさしとこゝろをぞ使よやり
 し夢よ見えさや(楊子雲長楊賦)覽其切焉(宇治拾)二ノくらけまばさしかよし
 き見えせ(同)廿三ノさやつさしかよめしこめて勤當せよ

さしかむ(神代紀)廿三ノ辛苦(降)同下一ノ嬰羅困厄(白文)廿二ノ過蒙見(寤)とよ

どのりをうけて此道よたしかむことの子をめぐみて親のささとつがしめんとあり
 さしかむ是ハ好ミ嗜ヤウニ聞ユレド此道ヲ己レカ業(今物語)七和哥の道よたしか
 きて其名聞ゆる人あり

たしぎぬ 出衣也

たどやうてんとう(源 藤の裏業)廿其秋太上天皇よぞらふる御位え給ひて

たひ(鯛)新六ノ三「ゆくはるのさかひのうらのさくらさひあかぬあたよけふや
 ひくらん(和名)十九ノ鯛犬比万ノ九ノ鯛つりはこり(同)十六ノ鯛願さきよかえせせ

補(六帖)三「あふことをあこたが浦よひくたひのさびさからば人もいぞかん

たび 度。折心ニ（うつは 藏開）上八例のるをさあきをさしめ給ふとびなれば
テヨシ上下べちのろくかど給ひとたして（源 紅葉賀）初をさく院の行幸のるんを月の十日
あまりありよのつねならせ面白かるべきたびの事ありとれば（枕）四十一たゞ来り
いのかか／＼よかりきもて来り／＼とびにいのかあらんとむねつぶれて（同）十三参れ
かどあるたびの仰せも過して久しうかりよける（同）九七をとり顔ある物き
ろふたびの藏人よかか／＼をる子かしたる（榮 御着裳）五法華經一部あまご経四十
九卷をぞくやうせさせ給ふ云々心ことよふとれたびの御法事よてどう／＼とち心よ
いれてつかうまつる（源 柳）四見奉るたびとよめづら／＼らんをいり／＼せん
（枕）十六人の顔にとりて死てよ／＼とみゆる所の度とに見れどもあかをか／＼めづ
ら／＼とあそおやめれ（狹）三ノ下御ありさまを度とよ殿うへに御心どうでか／＼給
ふさまあのみからせ（補 金葉）戀上「これよ／＼くおもひのか死を草まくらたびよか
へにいをかむしうとや 此たびもたび（新古）春下殿富「花もまさわかれん春のおも
ひいでよ咲ちるたびの心づくしを

たびのさかる（古）戀（伊勢物）五垣のくづれよりかよひけるやたびのさかりなれば
あると聞つとて云々（六帖）三「あふことをあこぎか浦にひく／＼ひのたびかさから

心人もしぞかん（源 若紫）一わらひやと煩ひ侍るとたびのさかりてたへがたう侍
れば（續紀）廿二多比重 氏宣 久云々

たび／＼（伊勢物）廿三よろこびてまつたたび／＼過ぬれば（源 桐壺）十か／＼こき仰
ごとをたび／＼うは給りながら（同 東や）二かの尼君のもとよりぞ母北の方への給
ひ／＼さまあどとび／＼そのめか／＼おこせけれど（枕）四ノ雪山ノ所 廿四かたをらある
人／＼ていそはきバ 患隆 たび／＼かたお死てりへ／＼えつかうまつりけがさ／＼あざ
れたりとそのまへまで人よぞかたを侍らんとてたちよき（狹）三ノ下大膳も神殿よ
参りたまひてたび／＼ふ／＼をがきて（山家）下「君がさめでえふの子日／＼つるのを
たび／＼千世をふべき／＼る／＼（拾玉）四「おもそざりさいのちあがらの山に又た
びたび法の花をそんとり（同）一「ふゆのよ／＼まが死の竹よ吹風のたび／＼夢をお
ぼろりはかか（源 みのり）廿心よこくもとめとゞめ給つべ死おとゞの御こ／＼ろさま
あきさめやけき程よとたび／＼のあやざりからぬ御とふらひのかさかりぬおと
よろこびさあえ給ふ（同 東や）四十からそぬ御身あたび／＼／＼きりてまで給こと
の（後拾）別「たび／＼のちよをさるかよ君やへんそ忍の松よりい死のまつまで
相摸 見

（万代）戀三「あひ死つゝおきもやられぬやをらひよ度々鐘のこゑをきこゆる（忠
雅重

見「これをうのふわたりあるほとゝぎす草の枕よさびくぞなく

附このたび此度(古)序かく此たびあつめえらされての山水のたえを瀆の真砂の

りぞおろくつもりぬれば(同)旅このたびぬさもどりあへて手向山もちのに

き神のまに(源空蟬)五いで此さびのまねはり(宇治拾)八のまのたびの道理

よてめさるべきたびはあらねども此うきへよりてめさるかり

附そのさび其度(散木)中山崎ちかくかりてそのさびかの海といふさいを

うさひてのやらせ給ひし事の思ひ出られてよめる(宇治拾)二刀をぬいてそり

かゝりたると死よそのたび笛を吹やして

附いづれのたび(榮後悔大将)三いづきのたびの御ありたよかのひと車にさてま

つらざりこの旅あそと哀よりあうて(万)四千さびぞわれのよかへらま

(千載)秋下「さがためよいかうてそか唐ころもちさびやちさびこゑのうらむる

(空穂 祭の使)九冊ひとさびよさととらふ

附かのたび(源繪合)九かのたびの御日記の箱をもとり出させ給ひて

附まへのさび(更級日記)まへのたびのいかりより給ふるの杉よとかけいでら

れいを

補さびまもかく(榮峯の月)とやくの御つかひりてさうぐうよりのさびまも

かかれども

補たび足袋宇治拾十一申の皮のたびは沓死りそきかして

さび旅。境をこえて行を云ハ常也又近きところに行て(拾)別宣「草まくらわきの

とから雁がねも旅のそらにぞ鳴わたりける(後拾)菅原「水ひきの白糸をへて

おるそたを旅の衣よたちやかさねん(拾)十旅よてよみ侍りたる(榮根合)卅正月八

日又やれぬ冷泉院は中宮とわらせ給ひぬ皇后宮の承香殿とお祈りさよおそいま

を中宮のうへの御つねねよおそいまはかくたびにおそいまを不どのとの殿上人近

衛司のやまぐひおひさるもいとをか(万)卅一「旅とへとまさびよかりぬいへの

いもがさせし衣にあかつきよけり(補)敦忠「たびとをくわゐる人をおもふまの

心のいろぞあらされよける

さびよまらる(拾)別秋旅よまらりけるよ云々

さびとある(源すま)廿かゝる旅所ともかく人さよがしけきども(同)わふひ六例を

らぬ旅所なればいたう志のび給ふ(狭)三中一品ノ宮ノ大将あちもまことにか

やましきを旅所よてかうくるおくいかせんとして(補)源東や七五十そのたびとあ

ろとづねおき給へ

〔たひつと(夫)〕冊六 清輔「たひづとはもたるうれいひそろく」とかまどおつるみやこ思へば

〔たびね(拾員)〕一 廿「思ふぞちむれこし春もむかへて旅ねの山は花やちるらん(山家)上」あそれしるひとみさらばとおもふのな旅ねの床にやどる月影(詞花) 別 民部内侍

〔都までおやつかかさせあらんむらたびねをいかよおもひやらま(源)〕わか紫 六「都までおやつかかさせあらんむらたびねをいかよおもひやらま(源) わか紫 六

〔そつ草のわり葉のうへを見つるよりさびねの袖もつゆぞわかぬ(古)〕春下 一 思ふどち春の山邊は打むきてそおもいそぬたびねをてか(源) 源 帚木 卅 内 己 二 りの

たびねもをさまとるるべく(同) 卅 女 遠 きた び ね の 物 お せ ろ ー さ ま ち ぞ せ べ 死 を

(同) 維 々 本 四 心やり給ふたびねのやどりの く 一

〔たびねのそら(万代)〕雜 四 俊 惠「秋ふかき峯の松をせ音さえてさびねのそらよ月かさふさぬ

〔さびなれぬ(夫)〕冊 二 師 時「旅かれぬ人は教よ雪ふらば蓑打かへせふさきもぞをる

〔たびのうきひ(万)〕九 卅 三 草まくらさびの憂をなくさもるまともあらんと

〔さびる 旅居(日本紀竟宴)〕「そめまよやまをさりて波のうへにあをふしが死に

たびるする哉(源) 關 一 初 さまの御旅るもさるりし聞て云々 限れる事もかかりし御

さびるかれとそと給ひて(同) 東 一 四 十 まらうそのおひけるそとの御たびる見ぐる

いと云々(散木) 上 卅 一 北山の邊はまわりて花とありきてやうくくれぬるそよ木

の下にて酒をどたべけるついであをさらけ取てよめる「こが心をかの梢はたびる

して身のゆくへをもあらととせらん(夫) 冊 六 堀 川 右 大 臣「山里の君がたびるいうぐひを

を人あ聞せん心かりけり〇まの哥の關白うちよいと久しくおひいて人々いとおそ

くて歸り給ふし鶯のあれたるを聞てと云々

たびのそら(源) 十 卅 一 てさびのそらにいうは御心づくしあるまどおそかりけん

(同) 一 十 源 齋 院 へ 一 なく旅のそらよかん物思ひにあくがれよなるを(拾遺) 春 一 六 人 不 知

帖) 朝 恒 六 下 (躬恒) 六 十 「古郷の霞とびさけゆく鴈はたびのそらよやせるをくらさん

(後拾) 秋 上 伊 勢 大 輔 「さよふかくたびのそらにてなく雁のおのが羽風や夜さむあるらん

(補) (詞花) 雜 下 帥 前 内 大 臣 「都までかがめし月をさる時ひさびのそらともおそえざりけり

(拾) 別 兼 盛 「さるかかる旅の空にもおくれねばうらやまし死に秋のよれ月(新拾) 旅 兼 盛

み人し「このめおくやさしあければたびのそらくるを道のうぎりよぞゆく(拾)

別 能 宣 「草枕われのみならせかりかねもたびのそらよぞあさわたりける(新古) 哀 傷 爲 頼

「ひとりにもあらぬおもひのあき人もたびの空よをかきかゝるらん(山家)上「常
よりも心ぞそくぞおもほゆるとびの空よて年のくるれば(詞花) 雑下道「都よてあ
がめし月のもろともまたびの空よいせよけるかを(新古) 秋下「故郷よ衣うつと
のゆくかりやたびのそらにも鳴て告らん(新續古) 旅 白河院「山のまよまぐる雲を
さきさて、たびの空よも冬い來よけり(源 須磨)「初かりのまひしき人のつらかれ
やたびの空とふあゑのかきしき(續古) 旅待賢門 院堀河「ふるさとよおあト雲るの月を
たびのそらをやおもひ出らん

補 たびのかりは(万)廿二「さらちねの母とわりきてまこととれ旅のかりはよやま
くねんかも

補 たびのよ(万)十二、廿四「客夜之久しくかればさよづらふひもと死さばせこふるこ
のでろ

たびやどり(夫)卅六「ひまもなく物思ふと死のたびやどりいかかるまよか月のも
るらん(源 總角) 四 御供の人々おきてこごづくり馬どものいそめるをも旅のやどり
のあるやうかと人のかさるとおせしやられて云々

たびやうた(夫)卅五「うりれめのうりれてあるくたびやかたをまつきがた死もの

よぞありなる(月詣)三 成範「霜がれの草ひきむをぶ旅やかたしぐれもるよひふしぞ
わづらふ(玉葉) 旅 慈鎮「雨されぬたびのやかたし日のせへて都こひし死ゆふぐれの

そら 補 瀆臣云旅やかたの旅宿也やかたのふるくは必舟と車とよのといへる詞ある
と後あつ轉トてたゞの家居をもいへり云々 夫木よ季經懷綱かとなとびやかたと
よめり

補 とびまくら(玉葉) 冬式子「たびまくらふしみの里比朝せらけかり田の霜よたづ
ぞあくある(新古) 上 雑 いつきのむろしをおもひ出て 式子内「やとよまはるの神やま
のたびまくらそらのうさらひし空ぞわされぬ 親王

とびころも(新古) 別あかへまりりける人よ旅衣つゝのいとして 能宣「秋ぎりのと
つたび衣おれてとよつゆさかりあるかよみかりとも

とびで、ち(古) 秋下「秋の山紅葉とぬさととむくれはをむわさへぞ旅で、ちを
る(源 さかき) 五 ふる元宮のかへりてたびのこ、ちし給ふにも御里せととえたる年
月の布ぞおせしめぐらさるべし

とびありき(續世繼) 序 やつこのかへとひあり死せるよ

とびゆく(古) 別「をがるなく秋の萩原朝とちてたびゆく人をいつとかまさん(夫)

廿二、匡房 「秋風よそが野のそ、死みだれあひてさびゆくひとの道たよもか(同) 家集 同義考 「逢坂やたびゆく人の志れもらよ一夜もやどりとらぬ物(同) 廿十、蟬 家集 同義考 「逢坂やたびゆく人の志れもらよ一夜もやどりとらぬ物(同) 匡房 蟬

の志れいやこの山の本の下やたびゆく人のやどりとらぬらん(同) 廿五 「葛かへで 志ける山路のむらしくれさびゆく袖ぞ色うつりなる(忠見) 八春のわかれせしむ

「大そらを山人とのむ春くれればたびゆく雲を霞とおもえん(拾) 別 忠見 「露よどよあ てドと思ひ一人しもぞしくれふる頃旅よゆきなる(夫) 卅六、鎌倉 右大臣 「旅をゆきしあ

の宿もりおのくしにわさくしあれやなさいまごこぬ(補) 卅九 「たびゆれよゆ くとあらせであもしにことまをさせで今ぞくやしき(同) 卅五 「へひとのりへ

りもやこといそひとまいそひまつらんたびゆくこれを(同) 卅七 「ちのかかくよ つとみつたびゆれも志らぬ君ぞめぐえたまを(同) 卅九 「あをよよから

みやこれゆく人もがもくさまくらたびゆく舟のとまりつむよ(同) 卅八、草枕たび ゆく君を

さびさち(和泉式部集)上 「あわれあることをいふに都いでゆくさひ道の遠死 かりなり(補) 元真集)さびさち行人みの、國と死のおりといふ所よやどりて

(補) たびのさち(散木) 「そをさへしうれし涙おちをひて露けかるべき旅のさち哉

(補) たびち(旅路) 躬恒集) 君がゆくさちもさひちの都よまたくかへるの山ぞあり

てふ○此歌群書類従ノ内ナルニハ道もたひらの都よいどあり平都よいひかたり 此方是也

たびすがた(源 せきや) 三 關屋よりさとまつれ出たるさびをがたせものいろくの あをのつきくしきぬひものくしりぞめのさまもさるかたにをかう見ゆ

たびせみ(うつろ 藏開) 上ノ女御の君宮なごさきあえ給ふかく侍りからひていかよ つきくしおやさん志をとおとづきよもと思給ふれどさびせくし侍れはあ

ん(源 楨柱) 九 年頃からひ給ぬさひせよせせくしななくていりであまた けさふらん(夫) 卅六 「あそれなる春のあけやのあさたちぬかきみのそあやくれ

の旅ぞと

たひと 田人(榮 御裳着) 十 此田人ともものうさふうたを聞きめせば

さひら(平 伊勢物) 八十(後撰) 維三 峯雄 「おをかべてみねもさひらよかりをんやまの せかくつさきもいらトをかくれ(後) (土佐日記) 和泉國までとたひつらよねがひたつ

(源わかき) 上、十 昔人の心たひらかよて世よゆるさるまよき事をおもひ 及ばぬ物とからひたりなり(六帖) 上、一 古郷をこかれて咲る菊の花たひらよあを

匂ふべらかれ(源さかき)四十 東宮の御代をさひらかよおそしまさばとのとおぞし
つゝ(源玉かひら)卅 ましてたきもくたひらかよおそしまさばとのな聞えかぐさ
む(狭)四十八 いとくおほしりそたひらかよ物い給ひ忍びつゝつね見
奉りてん(散木)中ノ。父の經信ツクツコテ わがともたひらかよのほりつらん事も
ありがさりぬべきやうよおぞえてほれをぐるそとよ云々(同)六十一 九つ浪のひく
しまにをむあまごよまたゝひらりありけるものを(兼重集)「まさであるあら
いそまたつ浪をればたひらけくこそわが國のあき。是ヨリ以下ハ(源澤標)七女に
てたひらかよ給ひをがら(同あふひ)廿たひらあよ事をりそてぬれば(同かし
の木)七女三ノ子ツ 心ぐるし御事とたひらかよとたにいかで聞ひ奉らん(同
三めづらしきおん事たいらかかりと聞いめてあはきよゆかいうおもほはし(枕)
六ノ八初 やんごどおれ所の名うちいひて御産さひらかよを教化したる(源はし
ひめ)二 此たびの男よてもかとおぞしるにおかトさまよてたひらかよ給ひ
ながら

たひらぎ(榮玉のりさり)

十御物のなたひらぎさるさまかれバ

とびいぐさら

谷川士清云日本靈異記ニ磔ヲタビイットヨメリタビハ飛ト通ス飛磔ノ義也ト云々○雅望按ルニ谷川ノ説正義也其外ハ皆臆説也言ニ足マ

(空穗 祭の使)

廿「川邊なる石の思ひのきえねさや岩の中より水のこくらんたびー

がさらといふとて云々此文石ト云哥ヨリたびしがさらとツケタルヲモテ証トス
ノ、常談ニチコモシヤクシモト云ルニ同シ(元輔)廿 筑紫よて大貳の御門よぞさい
を奉りあけらるゝあ「まがくらん玉のひかりをたのむりをかまもあらぬたびー
がさらぞ(源蓬生)九とびいぐさらをさまでよろこひ思ふある御位あらさまりかど
るるを(枕)一ノ女房のせんさども其里よりくる物どもをさめみかひやうとたびー
がさらといふまでいつのひこれをさちかくれたりー貫之が白川ノ國の草枕たび
ーがさらまで松の千年も君のとのみいれりて亭の子の日會尊に云

顯昭注

よもたもの魚をくむものなりあひあひ鯉子也 廣足接 今肥後よて魚を酌とる

小網をたぶといへりたもたあれり

たもと

(古)戀一「紅のふりいで、かくあまたよのさもとのみこそぬれまさりけ

れ(源末摘)

廿「唐ころもれまがあら、ろれつらけまばたもどのかくぞそぢちつゝの

と(拾)

雜春よみ「こゑたて、かくといふとも郭公たもとのぬきとそら音かりたり

(後撰)

戀二 清正母「ふりとけぬ君が雪々の雫ゆゑたもとよとぬ氷よけり(山家)上

「よふともわすれがたきの思ひでせ袂は月のやどるさのりぞ(古) 雜上よみ「うれ
しさをあよつゝまんから衣たもとゆさりまたてといたましを(和泉式部集)「霜
がれの何はぬきたるさもとどとさどめかねてぞわれもあがむる(同續集)「かりあ
ろもわきよよそふるものあらばたもとよくもあらとぞ思ふ(惠慶集)「さもと
かへるものにもがむいのこる衣の袖もそぢちさてぬる(万) 八ノ(拾)秋安 貴王「秋た
ちていくかもあらねどこのねぬる朝けの風いたもとさむいも(夫) 十三後 鳥羽院「日をわ
さる秋のむらさめ音をこて菊のさもともいろかさるころ

補 たもとよりていたしる(宇治拾)さかれをのおどものたもとより手いごさ
是ハワキヨリ手
ヲ出シタルナリ

たもつ(新古) 釋教 寂然「わたつとのふかたよーづむあさりせでたもつりひある法をも
とめよ(新後) 釋教 忠家「いつそりの心あらとと思ふこそたもてる法のみことなりけれ

(長秋詠草)「まけくをのされるひもの玉ゆらもたもてば佛よろあび給ふ(續紀)
七、欲保社稷(月清)上「此法はうはてさもてる玉なればあがきよてらはさうらなり
けり(源さかき) 十必む世の中たもつべきさうある人あり(同あかし) 八十世をたも
ち給はんよさむのりあるまどくりーこう見えさせ給ふ(同繪合) 廿齡さらでつかさ

くらゐたかくのやり世まぬけぬるひとのがくハえさもたぬわざかりけり(人丸)
下ノ(拾遺)神(万)十二「千早振神のたもてるいのちをもたがためと思ふこれから
十二 たれがためにあかくはり

か御らんせざらん(源さかき) 九見をめつる契をかりをえてがたく思ひとまる人
のものまめやかかりと見えさてたもさるゝ女のさめも心よくおしとらるゝか
り(同) 七 甘あれかんえたもつまどくこのもーはあきかたかりける **補** (續後拾) 神祇關
白太政

補 たもとほる(万) 十八「をふのさきこぎたもとほりひねゆんよん 元ともあくべき
うらよあらなくよ(同) 十七ノ長歌 三十六 三ふたよのさきたもとほり(同) 十七ノ「まささ
くもありさもとやり(同) 十六 同 十六 たこのーま飛たもとやり 鷹ノ

補 たもとこのいね 稻○ちも 散木 秋田「山里のいていこのめるたもとこよ風をよ
めきて袖しるるかり○顯昭注にたもとこの稻の名也但つねよちもとこといふを
たもとよといふよ此集よちもとよと書たるもあれと末の袖しるるよよせてた
もとよとよめるにやあらん五音かよひたればちもとよとをたもとことよよさせるよ
や此人の哥よ其例多く侍り 但 按 二句いていよのへるト書ル本モアレド何ノ詞

凡キコエズ誤字ナルベシ扱いてゐるトハ出井好メルニテ此稻ハ山水ナドノ流
レ出ル筋ニフセテ榮フルニヨリテシカヨマレタルニヤ今モアル稻ノヘクサアルナ
リ其莖多ク出ル者也トイヘハちもどこモ其意ノ名ニヤアランコハほうーこの稻を
てのこの稻ナドノコナルヘシ何トナクササナクダ、ヘタル也サレバちもどこトイ
ヘルガ本語ナルヘシ末の袖一布るよよせてさもとあよめるにやあらんトイヘレ
ド、サテハ袂ト袖ト重リテカヘリテ優ナラズ、ナホともどこトアル方ヤ正シカラ
袖を穿るらんハ水田よれもひヨセラレタルナルヘシ又按ニそでのこ稻トイヘルモ
同集ニアレバさもどこそでのこ對ヒタル名ニモヤアラン

たすく 助。万コワタリ(うつほ 菊の宴)下ノ人の命をたすくとおもひて此事を
たさり給へ(源 帚木)九 かまの志もよたせけられ志もいかまよびきて(同 夕顔)
四 又とりくたせられ給ひてあん二條院へり給ひたる(同)同 惟光をひたせは
てたのーまさるるよ(同) 四十 此人のたづきかーと思ひたるをもてあーたせはつ
さふらひに(同 若菜)下ノおどろくーき病もあらせたせけてまゐり給へとそ
のりー給ふよ(同 蓬生)十 左右の戸もよろずひたふれにけまをのこさもたせはて
とかくあけさごとく(文徳實錄)十ノ今毛亦大菩薩乃相助介護賜爾依天(源末つひ)

廿翁門ぞえあはやらねばよりてひきたくるいとりたくかり(同 桐壺)廿おそや

のかさめとかりて天下をたさくるかたよてみれば(續紀)下八先乃皇我御靈助給比

慈給 弊流物奈利補(源わか)下ノおもきやまひをあひたせけてあん参てまべー

七「海よまはれりそのたすはよか、らせバーはのや不あひよさせらへあまー(山家)

下「大浪にひかれいでたるこ、ちしてたせけ舟をき沖よゆるる、(平家物)四ノつ

よいたせは舟ともいくらもありけれども補(新後) 雜中、普光園入一むくぬべき世の

ことごりの思へども民のちからをたせけやいさる 道關白左大臣

たさき(万)十八母よいどかえ搓襪(うつほ 嗟峨の院)下七二宮のありらかあるのい

ねりのひとかさね織物の直衣たさきかけの御もかま今宮こもんの白きあやの御を

一のされ奉りてたさきおれていとをかーく云々(枕)八、うつくしき物、尼よをぎたる

兒の云々いとうつくしーとせれかけにゆひたる腰のかまの白うせかー々あるも見る

まうつくし(同)八、うつくしき物、いとどうこえたる兒の二つをりなるが白ううつ

くしきが二藍のうは物なときぬあがくてささあけたるがそひ出来るもいどうつ

くし(源 薄雲)十 たゞ姫君のささきゆひ給へるむねつきぞうつくしけさをひて見え

